
無限の未来

赤築秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限の未来

【コード】

N6575H

【作者名】

赤築秋

【あらすじ】

魔法使いの少女と異世界の少女が旅をする話。軽いノリで進む予定。

1 一人の始まり

「辛い修行の末、彼は勇者になりました。彼は旅への期待に胸を膨らませ、少しの食べ物に道具、お金を持って、生まれ育った村を飛び出したのでした。

……………勇者か……………

……………くすっ」

青い空！白い雲！

鳥は頭の上を歌いながら飛び回り、旅立つ生徒を祝福しているかのよう！

彼女の名字が呼ばれた。講堂の入り口で、背を伸ばし、堂々と歩いていく。
両脇の人垣から、溜め息が聞こえる。

「カンシエか、あいつ……」

「『首席』卒業って何百年ぶりなんだって。あっちで先生たちが言
つてた」

「『首席』つてさ……全科満点以上なのよ……？もうアレさあ……」
「化物だな……」

（化物？いいえ、違う。私は努力しただけ。

貴方たちとは違う。私には、遥か天上に、目指すものがあつたまで）

囁きあう生徒たちの愚かさにかみ上げてくる笑いを押し込めて、カ
ンシエは校長先生の前にたどり着いた。
片足で一步下がり、腕と膝を曲げて礼。

見ると、校長先生は可哀想なほどに震えていた。

紙を掴んだ指も顔も真っ白。冷や汗が次々と流れていく。

予想もしてなかったのだ。自分の代に『首席』が出るなんて。

この学院を卒業するには全ての科で九割以上を取る必要がある。

勿論、適当な勉強で取れるわけが無い。文字通り血と汗と涙の結晶、
それがこの学院での卒業を意味する。そうして卒業してようやく世
間の中での「一般の魔法使い」だ。

そついう学院で、先ほど誰かが言ったとおり、カンシエは満点以上
を獲得した。

『首席』。通称『化物』。

安心な将来を約束されたも同然だが、敢えて目指そつという者はい

ない。

普通の、生徒には。

「カンシエ・ミズイカ」

「はい、校長先生」

「其方は、我が国立魔法養成学院を卒業できるだけの成績を手にした。ここにそれを称し、其方を正式なしゅし、首席卒業生とする」

少し落ち着かないだろうか。

「こうして其方の歴史に素晴らしい事柄が加えられた。これを誇りとし、いいい以後更なる研鑽を積み、良き魔法使いとなる、ように」
「有難うございます」

丸めた羊皮紙が差し出された。

カンシエが差し出した手が一瞬震え、羊皮紙を受け取った。
校長先生が深くため息をついた。

これで、彼女は卒業生。

一人前の魔法使い。

カンシエはもう一度礼をし、踵を返して、早足で人垣を抜けていった。

全員が沈黙を以って彼女を見送った。

彼女が見えなくなってから、また呟きが聞こえた。

「何を考えているんだらうなあ…天才様ってのは」

「何を考えているんだ？」

すたすと学院の出口を目指すカンシエの耳元で誰かが囁いた。鬱陶しそうに目を細めながら、カンシエは呟いた。

「誰にも分からないわ。私の目指すものなんて」

学院を抜けた。

暗いところから明るいところに出た彼女を明るい日差しが苛む。

青い空。白い雲。

鳥は頭の上を歌いながら飛び回り、旅立つ魔法使いを祝福しているかのよう。

明るい日差しは、彼女にある人物を思い出させた。

その人物はいつでも、心の中で彼女に嘲笑を向ける。そいつを握り潰すのを想像しながら、カンシエは羊皮紙を握り潰した。

「誰も知らないわ。分からないに決まってる。ずっとずっと、雲よりも上に、殺したい奴がいる気持ちなんてね」

日差しによって俯いた彼女の顔につくられた影は、どこまでも暗かった。

1・5 パンが爆発した話

「そこに、登り行こうとする少女と、

堕ちて行こうとする少女の、

ある意味では無駄な邂逅があった」

何か起きそうな予感はしてた。

まあ特別なことなんかそうそう起きるわけないって思ったけど。

7

朝、起きてみると家には誰もいなかった。

とりあえず用意されてた朝食を食べた。

テーブルには自分の以外の朝食もあったけど食べられてない。冷たくなったカリカリトーストパンが静かに横たわっている。

そこでカレンダーを見て、今日は休日だったことにようやく気付いた。

………休みだったっけ？

まいいや。ラッキーってことで。

「遊びにいこーっと」

お気に入りの白い服を着た。

さあて、友達と一緒に空桶にでも行って…

その時、外から大きな音が聞こえた。

「おおっ？」

かなり大きな爆発音だった。しかしうちに被害はない、だから無視をしたかった。

しかし、顔に貼りついたカリカリトーストパンがそれを許してくれなかった。

8

無言でパンを剥がすと、家の壁が吹き飛んでいるのが見えた。

くそ、やられた…。

壁があつたところからはお隣さんが見えるはずだが何も見えない。

そっか、お隣さんが吹き飛んだのか。

弁償してもらおうと決心し、トーストパンをくわえ、急いで外に出た。

やっぱりお隣さんは瓦礫の山と化していた。
あらあら。

ひよっとしたらお隣さんも皆粉々に吹き飛ばされたかな。弁償は葬式のとくに請求しようかね。

急に強い風が吹いた。発生源を探してみると、近場のマンホールの蓋が開いていた。

近づいてみると、風はマンホールの中へと吹いているらしい。吸い込まれている、と言った方がいいか。

後ろを振り向いた。

お隣さんは瓦礫の山。

マンホールをのぞいた。

底が全く見えない暗闇。

これはきつと夢だ。とりあえず抜け出さなければ。そして朝食食べて友達とぱーっと遊びに行くんだ。

夢なんだから、飛び降りたって大丈夫なはずだよね。

最悪ベッドから落ちる程度だよね。

「これは夢、きつと夢なんだ」

そのとき、なんとも情けないことに、しゃべった拍子にトーストパンが落ちた。

「あっ！あたしのトーストがっ！」

トーストを追って、懐かしき滑り台を滑り落ちるように、足からマ
ンホールに飛び込んだ。
白兔じゃないところがミソ。

まあ、夢なんだからトーストを捕まえられるわけがないんだけど。

どこまでも落ちていく。

耳元で誰かが笑った気がした。

誰、女の人？

光が。

轟音がして。

頭がくらくらする。

体力が抜けていく。

下を見た。

下に、人がたくさんいるのが見えた。

「な、なすび集団？」

これ、まだ夢なの？

……朝食になすびなんて出てたっけ。

1・5 パンが爆発した話（後書き）

どうも、作者です。

前話といいこの話といい主人公らしい子たちには思えません；
とりあえず私にシリアス続きは無理だということがわかってもらえ
たでしょうか……！

2 少女と試験

「旅を始めた勇者の行く手に、化物に捕まった一人の少女が現れました。勇者は少女を助けてやりました」

今こそ、今まで積み重ねてきた物たちを發揮するときだ。

目標に近づく第一歩。

魔法協会に入るための試験への挑戦。

二次試験では、明るい顔の受験生を全く見かけない。

質が落ちているのかしら、とカンシエはため息をついた。そういえばこないだ卒業したのはカンシエ一人だった。普通は少なくとも十人はいておかしくないのに。

恨めしげな顔の受験生たちが次々と帰っていく。

基礎知識を問う一次試験をパスした次の二次試験は、部屋の中に一人ずつ呼ばれ、何かを魔法でさせられる。何をさせられるかは受けるまで分からない。

ただしカンシエには、例えば試験官2、3人と戦わされる試験でも勝てる自信があった。それだけの覚悟は既に持ち合わせていた。

「次、カンシエ・ミズイカ」

カンシエは、なんだか卒業のときとそっくりだ、と思いながら歩き出し、部屋に入った。

「子供か……」

「最近は勘違いした子供が多いことだな」

あたりを見渡すと、紫の塊がカンシエに馬鹿にしたような視線を注いでいた。

全てが石でつくられた部屋は狭く、数人の試験官が窮屈そうにしている。

その揃いの紫の衣の中に、二人、黒のローブの人と白のローブの人がいた。

ローブの模様の細かさと高級感、たくさんの装飾品からして、高位の魔法使いだと思われる。

そういえば、協会の人が将来的に期待できる人材を探すために試験を視察に来ると聞いたことがある。

一次試験から今までずっと冷静を保ってきたカンシエは、今になって漸く緊張し始めた。上手く行けば、早々と魔法使いの高い地位に上れるかもしれない機会。

「それでは、魔法陣を使い、この呪文を唱えなさい。貴方の魔力が十分なら、白い天使が降りてくる幻が見えるはず」

積み重ねてきた物たちを……？

(協会の試験が、たったそれだけ?)

「分かりました」

納得がいかないが、呪文の書かれた紙を受けとりながら、カンシエは返事をした。

部屋の床に描かれた魔法陣。これは使用者の魔力を感知して発動するため、杖などの道具は必要ない。世に出て行く分の魔力ならば、必要ないのが当たり前だ。当たり前だが、あんなに落第者が出るほど大変な魔法ではないはず。やはり質が落ちているのか。

あまりに簡単な試験内容に少々呆れながらも、床に跪いて魔法陣に手を当て、カンシエははつきりと呪文を唱えた。

「我に降れ、白の翼……」

そして、待った。

三呼吸。

何も起こらない。

(…あれ?)

「我に降れ、白の翼……」

何も見えない。

(え、嘘でしょ?)

目を見開き、カンシエはまた唱えた。

が、蝋燭の明かりしか落ちてこない。

(こんなはず……だって魔法陣だけで発動させる練習ならいくらでもやってきたし)

更に唱えようとしたとき、試験官の誰かがぼそりと呟いた。

「……こいつも無理か」

むっとしたカンシエは、紫の壁を見上げた。

「待つてください、絶対出来ますから」

「なら早くしろ、時間をかけすぎると迷惑だ」

カンシエがもうこいつらに向かって魔法唱えてやるうかなとか思っていたその時、黒のローブの人が笑いながら言った。

「…もう少しくらい待てないか？」

それに続けて白のローブの人が笑いかけ、

「集中すれば大丈夫よ。ね？」

と言ってくれた。

「…はい」

カンシエはだいぶ励まされたが、更に緊張と焦りが増した。

(こんなところでつまずいてる場合じゃない！)

でも、何が違うのかわからない。

抑揚？発音？まさか魔力？

試験なのだから、多くの魔力がいる魔法陣なのかもしれない。

集中しなければ。

魔力を集めなければ。

しかし、時間とともに焦りばかり増して集中ができない。

カンシエが今までかいたことのない汗が流れ落ちる。

心の中で、奴がわらっている。

(…つるわい…)

(私は首席、私は化け物、誰にも届くことの叶わない天上へ行くの！)

(あいつを、殺さなければならないの！)

苛立ちのままにカンシエは両手を魔法陣に叩きつけ、叫んだ。

「我に光を、白の御使い！」

自分でも何を叫んだのか理解していない。
既に頭は空っぽ。

魔法陣から光が立ち上った。
試験官たちが顔色を変え、カンシエに近寄ろうとしたが、黒のローブの男が阻んだ。

「こんな受験生は見たことがない、即失格に！」

「お前が急かしたのである。それに言っただろう。待て、と」

「あら、まあ……」

白と黒の二人は微笑んでカンシエを見守った。
正気に戻った当のカンシエは、自分のデタラメな叫びで光を放ち始めた魔法陣に戸惑っていた。

その時、天井から光が差した。

頭がくらくらする。

魔力が渦を巻いて。

上を見た。

白い何かが落ちてくるのが見えた。

「……天使様、なの？」

魔方陣の光は、カンシエにとって希望の光だった。

そのときまでは。

3 魔法陣と少女

「勇者は出会った少女と話をして驚きました。その子はこの世界のことを何一つ知らなかったのです…」

…つまり、えっと、知的障害ってやつかしら？」

さっきの嫌な音からずっと、部屋は静まり返っていた。全員の視線は、床に横たわる人物に注がれていた。

それは天使じゃない。断じて。同じなのは白い服装だけで羽も何もない。そもそも本物の天使を呼び出す試験ではなかったのだし実体化しているわけがない。

試験官の一人が魔法陣にへたりこんだカンシエを睨み付けた。

「お前、勝手に何をした？！ 見たところ召喚魔法のようだが、しかし何を召喚したんだ！ これが天使だとも言うつもりか！」

「わわ、分かりません！」

「学院卒業直後というのは偽りだったのか？！ そんな未熟者が人間を完全に召喚するなどできるはずがない！」

「それは、本当なんですが…」

もうカンシエの試験がぐだぐだになってしまったことは明白だった。カツとなって勝手に詠唱を変えてしまったのはカンシエが悪い。それにぱつと見て、召喚されたのは人間。

カンシエが合格できる、いや、その前に、ただでこの場を出ていく見込みは無かった。

試験官の一人が床に倒れたままの人間を揺さぶった。

「おい、おいお前、起きないか」

「……………」

声にならない声を上げて人間が起き上がった。

どうやらカンシエと同じくらいの少女のようだった。

床に座り込んだ少女は辺りを見渡し、目を丸くした後：

「あたしのトーストどこーっ?!」

と、叫んだ。

今度は全員が目を丸くした。反応に困る。トーストってお前。

最初に勇気を出したのはカンシエだった。

「ね、ねえ貴方、どこから来たの? って、召喚したのは私だけど、

デタラメだったし……ここは魔法の町だけど
「は？魔法？…」

……

……なに言ってるの、それどこ？」

どこと言われても。

カンシエは少女が落ちた衝撃でまだ混乱していると思い、説明し直した。

「魔法の町、わかる？ この大陸の大都市の一つの…」

「え、魔法って魔法？ 杖と呪文のあの魔法？」

「え、と…それ以外あるかしら…まあ違う形式の術を使う人もいるかもしれないけど、私が使うのはそういう魔法ね」

「君、魔法使えるの?!」

「……ええ」

「凄い！ 魔法って実在したんだ！」

「……」

話が進まない。部屋の魔法使いたちはいよいよ混乱した。魔法の存在を知らない？ 頭を強く打ったのだろうか。少女は興奮した様子で部屋内を見渡している。

「それで…あたしはどうしてこんなところにいるんだっけ。確かトーストパンがマンホールに落ちちゃって…」

「それで？」

「追ってあたしも落ちた。それでここにいるんだ、そうだよ。ありすの前にパンが落ちたのだね」

「は、はぁ…そう…」

「ありす？ マンホールって何？ と全員が思ったがこの頭がどうかした少女に尋ねるのは躊躇われた。まるで異世界のことでも聞いているようだ。」

「いや、ひょっとしたら彼女は本気で言っているのだろうか。」

その時、試験官の誰かが呟いた。

「まさか、東の…」

「恐れのようなものを含んだその言葉は、他の試験官たちにも広まっていく。」

「東…まさかあの土地…?!」

「かもしれない、彼の地の文化は奇妙だと聞く…」

「まさか、それは有り得ない…!」

紫の壁が険しい顔でひそひそ話をしているのはあまり健康的な光景じゃない。

その会話の内容はカンシエには聞こえなかった。

やがて少々血相を変えた試験官が少女の前に立った。

状況を理解できない、いやさせてもらえない少女はぼーっと見上げた。

「お前を首都に送る」

「は？」

「え…？ それはどういう…」

「処遇は首都で決められるということだ」

「は、はあ？ 何故ですか？」

「処遇、って…なになに、あたし裁かれでもするの？」

「わかっているな、貴様もだ、カンシエ・ミズイカ」

「…それは認めますが」

一般人を召喚するなんてあっていいことではない。カンシエに罪が課せられてもおかしくはないが、この子は…

カンシエは少女を見た。

いや、この子はいきなり自分に召喚されただけの被害者だ。首都に行ったところで不当な扱いを受けるとは限らない。ひよつとしたら帰れるかもしれない。

…けど、ここは魔法の町だし、人を家に帰す魔法くらいすぐに使えないのだろうか。

尋ねてみたいが、今試験官たちは尋ねられる感じではない。有無を言わさぬ圧力を放っている。自分は一般人を召喚したもしかすれば犯罪者、この子は魔法を知らない異世界人。ここは従うしかなさそうだ。

少女はそんな空気を気にせず試験官に先ほどカンシエにしたような理解不能な質問を放っているが、全く相手にされていない。

「それでは、その魔法陣の上に立て。首都まで転送する」

「あの、ちよつといいでしょうか」

一気に睨まれるとすくみあがりそうだ。

こんな質問は今場違いだと分かっていたが、カンシエはせずにはいられなかった。おそらく人並みはずれた貪欲なほどの願望に突き動かされて。

「私の試験は、どうなったのですか」

「……人を召喚するだけの魔力と集中力があれば十分。通常なら合格になるところだが、こんな状況では試験も何もあつたものではない」

「…そう、ですよね」

まあ、たとえ合格にしてもらつたとしても、こんなことをしたのだから協会になんて入れてもらえないかもしれない。今は保留にしておいてもらいたい。

その時、ずっと黙っていた白黒ローブの二人が口を挟んだ。

「おい、私たちを忘れてはいないか」

「い、いえそんなことは！ただ今回のことは我らが協会の試験のこと、あとは首都に送り協会にお任せした方が色々と安心かと」

「あら、なら私たちにも決めさせてくれますか？」

「は…？しかし、お二方はこの町の協会の方では…」

「いいえ。私たちは首都から来ました」

「な……」

試験官たちに言つてなかつたらしい。お茶目とかそういう問題じゃなく、真剣に問題だと思われる。

白黒の二人は試験官たちを思いつきり無視して、カンシエたちに話しかけてきた。カンシエは思わず背筋をぴんと伸ばした。

「この事はもう少し本人たち抜きで話し合う必要がある。その間かなりの暇があるのだよ」

「だから、貴方たち、歩いて首都に來ない？」

「え…歩いて？」

確か首都には歩いて数ヶ月…その間にまともな町は一つだけ、あとは町とはいえない村だけ、のほず。そんな旅をする物好きはそういない。魔法陣のある町から町へ魔法で移動するくらいだ。

記憶の中では、カンシエは本格的に旅をしたことはない。長らく勉強漬けだったために、村での泊まり方、野宿の仕方、いや旅の間の食料のことだつて真剣に考えたことなどない。

隣の少女は青ざめるカンシエの肩を掴んで無茶苦茶に振った。

「旅行だつて、旅行！ 魔法の世界で旅行ー！ あたしつてすごく幸運なんじゃないの?!」

「旅行じゃなく、旅…」

「そうだな、旅はいいものだから」

「え、ちよつと待つ…」

「ねえ、良いですよね？」

白黒ローブの二人がにやりと笑った気がした。実際はフードで見えなかったが。

カンシエはもしかしたら犯罪者、二人の偉人はかなり高位の魔法使い。い。

それでもカンシエは怖気づいたり…

「わ、私はっ

」

夕日に見送られ、うなだれて家路につく。

さつきまで彼女を家に帰してあげようと思っていたのが馬鹿みたい
に思えてきた。

「ねえねえ、君の名前は？」

「…カンシエよ」

「カンシエね。あたしはアルマ。トーストパンを食い損ねた一般人
です。よろしくお願いしまーす……あ、ちょっと待ってー！」

魔法協会メイギア支部を背にして、カンシエはすたすたと歩いてい
った。

学校では天才ともてはやされていたのに。

‘化物’と恐れられていたのに。

これから上に登る予定だったのに。

あいつを殺す予定だったのに。

どうなっているんだろうか。

魔法陣は作動しなくて。

訳の分からない人間が出てきて。

首都まで徒歩移動を強制されて。

（私の、私の計画は？ 輝かしい人生設計はどうなったのよ?!）

心と耳元で笑い声がした。

耳元のほうで涼やかな声で囁かれた。

「総倒れだ、ザマを見る」

「どういふことよ、ザマを見るって」

「待ってってー！」

「あー、もっつるさーいー！」

今ばかりは耳も心も塞ぎたかった。

ついでに自分も誰かに召喚してもらえないかな、と切に思った。せめて、とーすとかまんほーるとかが無いところに。

3 魔法陣と少女（後書き）

遅くなった……

ようやく主人公その2登場です。

決して頭がおかしい子ではありません。

おかしいように見えるのは周囲の環境がそつさせるのです。

4 少女と家

「仲間と共に、勇者は旅を続けました。旅の途中、勇者は自分の記憶の中の故郷に少女を招待しました」

……個人的な話なんて、普通、よっぽど暇人じゃない限り誰もまともにも聞いてはくれないのに」

とりあえず自宅へと帰還したカンシエは、入口を開く前にキツと後ろを振り向いた。

そこには目を輝かせたアルマがそわそわして立っていた。

「ちょっと待ってて。片付けるから。その辺の店覗いててもいいわ」

「えー？ 全然気にしないよ」

「私が気になるからよ!!」

叩きつけるように言った後、カンシエは中に入って、叩きつけるようにドアを閉めた。

誰も迎えない。静寂と慣れた匂いのみがカンシエを迎える。が、目に見えない笑いがいきなり背に降りかかった。

『もう少しおしとやかな言い方はできないのか』

「っさい。黙りなさい」

『ほらな、だんだん口が悪くなっているぞ。卒業ちよつと前あたりからか。さてはあいつの影響か？』

「……リユー、黙りなさい」

カンシエが低い声で呟いた。すると、部屋内に氷の粒混じりの白い風が渦を巻き、カンシエの裾を揺らして消滅した。

次にそこから現れたのは、青い長衣を纏った凍りつくほど美しい少年だった。足は地に着かず、空中で揺れている。

世界一不思議で美しい存在、精霊。それは自我を持った魔法の素の塊が人の思念に影響されて形を持ったもの。ほとんどが切れ者で性悪、人間には好意的ではない精霊ばかりだが、上手くやれば服従させることができる。ただし、かなり難易度が高い所業となる。

それにも関わらずこの精霊・リユーはカンシエと契約を交わし、カンシエの支配下に降りた。カンシエより少し上くらいの年に見えるが、実際は何百年と存在しており、他の精霊の例に漏れず尊大な態度でカンシエを馬鹿にする。そもそも、契約を交わした際にカンシエの思念に影響されてこのような姿なのだから、いくらこの少年に腹が立とうが悪いのはカンシエとなってしまう。

生意気な笑みを浮かべているリユーを尻目にカンシエは周りのものを片付け始めた。

いつ見ても荒れた家だ。内部には数多の傷跡。色々なものが散らばり、壊れたまま放置されている。

ずっと勉強だけに打ち込んできたために、これらの物に目を向ける

ことなんて無かったけど、改めて見るとあまりの散らかりように嫌気が差す。
壊れたもの、いらぬものは後で捨てることにして一まとめにし、どうしようもない床や壁の傷は物を置いたり積み上げたりして隠してみる。

その傷は

目の前で、背の高い少年が笑いながら大剣を振るった。

「……！」

尋常ではない寒気が走った。思わず息を呑んだカンシエの目の前で、大剣と少年は消えた。

カンシエは拳を強く握りしめた。が、すぐに開いて頭を振る。

幻が見えるほどに、心にはあいつが強く棲み着いている。忌々しくて気分が悪くなる……

いや、今はそんなこと考えてる場合じゃない。

カンシエの思いを読み取ったかのようにリユーが呟いた。

「全く大変なことになったな。人間を召喚しただけでなく首都まで徒歩での旅とは。ザマを見る」

「だから、それどういう意味なのよ」

「物騒な動機で努力してきた報いだ。これを機に少しは常識的になるがいい」

「他の動機なんて有り得ないわ。あれこそが私の人生の唯一の憂いだからね。それに私はいつだって常識的じゃない。誰よりも優秀な

素晴らしい常識人だわ」

「どこがだ、ただの根性悪な化物のくせに」

「こ、根性悪ですって…？ リュー、貴方！」

部屋に怒号が響こうとしたその時、入り口の扉がカ一杯叩かれた。

「もーいいかいー?!」

アルマの能天気な叫びが聞こえた。

ノックはどんどん強くなる。目の前には「ほら見る」とでも言いたげな精霊。カンシエは是非頭を思いつきりかきむしりたい衝動に襲われたが、そんな品の無いことは育った環境の素晴らしいカンシエにはできなかった。

「分かったわよ早く入りなさい！ 頼むから扉を壊さないで！」

「うんわかった！ お邪魔しまーす！」

開かれた扉の外からはアルマと一緒に近所のひそひそ話が入ってくる。

「あの子、なんなのかしら…」

「あの子ね、いきなり売り物の水晶玉持ち上げて

『これで魔法使うんですか?!』

って言うのよ。そんなの当たり前でしょ、しかも投げようとしたのよー」

「あいつ、俺のローブ引つ張って

『魔法使いなんですか?!』」

だぜ。見りゃわかんだろ、何考えてんだ…」

「ありえないわよ…」

その話にカンシエの顔がひきつり、何も知らない笑顔の当事者・アルマに口元が震える。

油断してた…：アルマはなんにも知らないんだった。これじゃ放し飼いにした魔法生物同然。制御できないまま飼い主を不幸にはめていく…

「へー、簡素だね…：纏めてある山は高いけど」

カンシエはもうここを引き払うし、近所の店や家から変な目で見られる心配はない、けど。もしかして、もしかしたら戻ってこられるかもしれないのに。

今、おかしな噂をされてしまったは。

(…：もう何もかも嫌になってきた…)

前はあいつに苦しめられて、今はこいつに悩まされて。

過去も現在もこうなら、もしかして未来も…？

「やっぱり愛着ある？ 寂しいよねー、これから旅に出るんだし」

もう魔法でもどうにもならない。これからは学校で習ったことは本当になんの役にも立たなくなるかもしれない。

とりあえず強く生き抜こう、とカンシエは心に決めた。
その心には誰かが巢食っているが…

「あたしの家はトーストと一緒に壊れちゃったよ。あはははは」

「お願いだから静かにしてて」

その後、カンシエは一つの部屋にアルマを案内した。

ここは寝台以外に物はほとんど置かれていなかったが、代わりに壁や床のあちこちに大きな傷跡があった。

（この家、あっちこっち傷ついてたな…）

アルマは傷跡をなぞり、不自然なほど綺麗すぎる切れ目に息を呑んだ。
誰かが迷いなく切り裂いたかのような切れ目。

「今日はここで寝て。あんまりいい部屋じゃなくて悪いわね」

「寝れば十分だよ。あと食事があれば最高かなー」

「余計な心配しなくていいから。飢え死にしるなんて言わないわよ」

人生を狂わせ始めている元凶、しかしそれでも彼女は同い年くらいの女の子。まともな部屋に入れてあげられないのは申し訳ないが、どうせこの家はどこもあんなものだ。

アルマを部屋に突っ込み、カンシエは自分の部屋へ戻った。ここは家で唯一、散らかっていない。文字通り命がけで死守したから。

カンシエは机の上の紙を取って、上へと掲げた。

ふわふわと横を浮くりューが頬杖をつく。

「それも置いていくのか？」

「まさか。忘れていたの…ひよっとして私、このせいで試験に失敗したんじゃないかしら…」

「何を言うか。人の召喚にどれだけの魔力が必要だと思う」

「…そうなのよね」

紙が手を離れて浮き上がる。それは光の粒に分解され、瞬く間にカンシエへと消えていった。

その紙は学校の校長先生がカンシエに手渡した、名誉ある卒業証書だった。生徒の魔力を高めてくれる学校の最後の後押し。

「そこがおかしいのよね…高々首席卒業したばかりの私がそんな魔力を持つてるはずがないわ」

「たかだか化物、なあ…確かに学校とやらの成績がよくても魔力が上がるわけではないが」

「…全然解らない。とにかく疲れたわ。早く荷造りしなきゃ」

その後、考え事をしながら荷造りしていたカンシエは見事に食事を忘れ、飢え死にしかけのアルマに「食べ損ねたあたしのトースト！

お願い、今すぐあたしの夢を叶えて！」と大声で叫ばれる羽目になった。

4 少女と家（後書き）

アルマはショックでトーストを天馬かなんかだと勘違いしているようです。

5 少女たちとまだ出発できない

「うわ、あちこち魔法使いだらけだ」

「そうだね」

「……あんまり興味ないみたいだね。まあこんな町も見たことあるから当たり前だけどさ」

「あ、ごめん……」

「謝んなくていいよ。そういや皆は？」

「多分観光中だよ」

「は？ ったく、あいつらは……俺たちの目的解ってんのかな……」

「いいんじゃないかな。たまにはハメを外しても」

「俺たちはいつも外してるようなものだろ……迷子にならなきゃいいけど。うわ、見なよ杖だけでこーんなにバリエーション豊富！。木の無駄！。杖なんか飾りです。偉い人にはそれが」

「そういえばいつも杖使ってないよね。殴るとき以外」

「手が痛くなるし。俺は凄い賢者だから杖なくても魔法使えるしね。にしてもマジで木の無駄。水晶の無駄。そんなに資源豊富なのかね……ここは程度低い奴らしかいないんだな、かわいそー」

「……剣で魔法使ってごめんなさい」

「え、いや、何も君の程度低いなんて言っただけ……大体、君は純の魔法使いじゃ無、ちよ、落ち込むなって！」

……露店を見回るとある剣士と魔法使いの会話。

「おー、昼間は賑やかだねー。そんなに必要なものあるのかな」

「何も魔法用品だけじゃないわよ。食べ物とかも売ってるわ」

「トカゲの姿焼き、カエルの串刺し、目玉汁……各種？」

「貴方の想像の中の魔法使いははやにえみたいなのばかり食べるのね。流石に食べられないわよ。裏で怪しいことやってる奴らなら食べるかもしれないけど」

「怪しいことって？」

「……闇魔法」

あまり口にしたくない、といった様子でカンシエが呟いた。

朝、カンシエとアルマは旅立つ準備のために魔法の町メイギアの商店通りを歩いていて、立ち並んだ露天には様々な魔法用品に加えて日用品も売られている。

カンシエは少々離れて歩いている。昨日のアルマのことのせいで、人々の冷たい視線がとても痛い。

カンシエの服を借りたアルマは慣れない長い服をもてあまし、ふらふら歩きながら尋ねた。

「闇魔法って？」

「闇の素を集めて使う魔法。主に相手の心身の状態に影響する面倒な種類の魔法よ。食らうと目や耳が使えなくなったり、精神に異常が出たりする。その他にも様々な思いもよらないおかしな魔法を研究してるらしいわ」

「ふうん……怖いね。あたし耐えられる自信無いや」

「耐えなくていいわよ。貴方が闇魔法使いに襲われる状況がまず考えられない」

うっん、寧ろ襲われて異空間にでも消えてほしい……

と思っただが、彼女を首都まで送り届けられなかったら自分がどうなるか分からないのでカンシエは黒い願望を中断した。

そんなことは知らない白いアルマはせわしなく動きながら無邪気に質問を重ねた。

「そういえばさ、魔法ってどういう仕組みなの？」

「どう、って……空中の魔法の素を集めるのよ。素が集まって形を作り、魔法使いはそれを放つ。これが魔法。詠唱は素に語りかける言葉よ」

「空中の、素？ に意思があるの？」

「ええ。そうじゃなきゃどうするのよ？」

「どう、って知らないけど……カンシエは楽器持つてるけど、杖じゃなくてもいいの？」

「それは飽くまで素と魔法使いを媒介する物よ。それと同時に魔法使いの魔力を高める。杖とか楽器とかの選択は魔法の形式とか好みによるから基本はなんでもよくて、例えば魔法を使う剣士は剣を使うわ。私は音楽による魔法の発動が好きなだけよ」

「へえー……あたしも使いたいなあ」

「まず魔法を知らないのだし、すぐには無理ね」

「そうかなあ……」

「あ、そうだ」

カンシエが一つの店に駆け寄った。アルマがその場でうとうとしていると、しばらくして戻ってきたカンシエが何かを差し出した。

アルマの手に落とされたのは、銀の装飾が付けられた短剣だった。

カンシエはアルマより装飾が多く付いた短剣を持っている。

「持ってて。念には念を入れて」
「なんでカンシエのが高そうなの」
「貴方には魔力無いのに無駄に増幅しなくていいでしょう」
「……あ、つまり、このアクセが魔力をサポートするんだ」
「……？」

横文字はカンシエには伝わらなかった！
とりあえずそれぞれ短剣を腰に挿し、再び歩き出す。

「こういう装飾は魔力を高めるの。だから沢山つけければそれだけ効能はあるけど、重いし見た目も悪いから普通はそんなにつけないわ」
「なるほどね。で、あたしはこの短剣で何ができるの？ 魔法が使える？」

「いや、それはどうかしら……もしかしたらを考慮して、よ」
「もしかしたらあ？」

何処にでも魔法がありふれているこの世界なら、もしかしたら、魔法を知らない人でも魔法が使えるようになったりする……かも、なんて。

そんな話は聞いたことがないけど。

「カンシエはこういう感じじゃないと思ったけど」
「こういう感じ？」
「刃物を持つような感じ。やっぱり、包丁なんかとは用途が違うしな」

「このくらい……慣れてるわ。馬鹿にしてる？」
「まさかあ」

(幼い頃はもっと恐ろしい凶刃に震えていたときもあったわね……)

迫り来る哄笑と鈍色の光を、手首を強く掴んで無理矢理意識から追い払った。最近やけに思い出す機会が多い。しっかり心を閉じておかないと。

そういえば、アルマは家中の斬り傷跡について何も言わない。説明したくないので好都合ではある。

歩いていると、進行方向の道がたくさんの人で塞がれていた。どうやら一つの露店を見ようと集まっているらしい。

人々の興奮した顔と声からして、何か魅力的な商品が置いてあるのかもしれない。

「え？ 何？」

「掘り出し物かしら。回り道はないし、しょうがない、突っ切るわはぐれないでね」

「はい」

カンシエが先に進んだ。後ろのアルマの足音を聞きながら人込みに入る。

その時。

「はい押さないでー安いよー安いよーこれがあればどんな生き物も貴方の意のまま！ 限定、魔法の首輪だよー」

「なっ、なんですって？」

魔法の首輪。正しくは動物や魔法生物を服従させるために使う。

正しくは。

しかしカンシエの頭の中にある光景では、首輪をつけられているのはなぜかアルマだった。

『わんっ』

（首都に着くまで、アルマにこれ以上変なことをさせなければ、私の精神は平穏に保たれるはず…
そう、これ以上冷たい目で見られるなんてまっぴらごめんよ）

人に首輪をつける方がよほど冷たい目で見られそうだが。

反射的に露店に向かってちよつとずつ人波を掻き分け始めたカンシエの耳元に冷たい風が吹いた。
カンシエはびくっとして、見えない精霊に弁明しだす。

「な、何よ！ 別にアルマにつけようなんて考えてないわ！」

『……』

「あ、ああもう！ 戻るわよ！」

人波をかき分け、カンシエはなんとか元の場所辺りまで戻ってきた。
しかし。

「アルマはどこ？」

『お前が置き去りにしたせいで、人波に飲まれたんだろっが』

呆れたその声に、カンシエはあさっての方向に視線を向けながら唇を尖らした。

「……………だって、こづいづことが起こったら大変だから、私、あれを買おうと……………ね」
『……………』

可愛らしくやり過ぎそうとしたカンシエに、冷たい視線が向けられた。それは決して、目に見えぬ精霊からだけではない。

『最近のお前は、なんというか……………』
「さ、さあ、さっさと抜けるわよ！」

ひくっ、と口の端を引きつらせ、カンシエは再び人波をかき分け始めた。

その頃、アルマは首輪の露店とは反対の露店の前に立ち尽くしていた。
た。

輝く瞳は、台の上に置かれた白い塊に釘付け。

（この子は確か、昨日市場で迷惑かけまくってた子だ。放つといたら何されるか解ったものじゃない、けど声かけてオレに災いが降りかかったら嫌すぎる。しかし……………）

葛藤の末、店主のひよろい青年は勇気を振り絞り、少女に話しかけた。

「ね、ねえ君、そろそろ店じまいしたいんだけど……………」
「これ、銃ですよね」

うん、やっぱり話を聞かない子だった。

心中涙を流しながらも、店主は少女に親切に答えた。

「そつだよ。けど、銃は魔法の発動には向かないからメイギアではあまり注目されないのさ」

「どうして銃は向かないんですか？」

「銃は、増幅した魔力で魔法を撃つよりも、魔力そのものを撃ち出す武器だからね」

「鉛弾は撃たないんですか？」

「鉛弾？ なんだい、それ。どうして鉛を撃つ必要があるんだい」

「……いいえ、なーんでもないです。ふむ、魔力を撃つ、か」

アルマはしばらく、銃を撫でたり眺めたりしていた。銃なんて珍しいものを見る機会はそうそうないはずだが、その手つきや目付きが意外と優しく、慎重だったことに店主は驚いた。

やがてアルマは、銃から目を上げ、店主を見ると、きっぱりと言った。

「これ、幾らですか」

「は、……は？」

「買いたいです」

「い、いや君、昨日の君の騒動を見るからに、君は魔法の知識があまり……無いみたいじゃないか。それで使えるのかい」

「魔力を撃ち出すなら、必要なのは魔力で、魔法センスじゃないでしょう？」

だから、お願いします、とアルマは真剣な顔で言った。

店主はその気迫に圧倒されそうになり……しかし、なんとか抗い……

…銃を布に包むと、荷物を纏めた。

「あ」

「これは売り物じゃない、飾りだから、ね。悪いね」

「ちよ、もう店じまいですか？ まだ…」

「売り物はあらかた売れたから、ね。君もこんな怖いものに手を出さない方がいいよ、ね」

「えー……」

荷物を担いだ店主は、小さく手を振り、人波に紛れた。

アルマは手を振り返し、残念そうに溜め息をついた。

そして、思い出した。

「あつ、カンシエ」

「アルマー！ ホントどこ行ったのよ、あの子……本気で首輪つけるわよ！」

人混みを抜けて叫びながら見渡すが、アルマは見つからない。

まだアルマについては全く解らないが、なんだか彼女ならどこへ行ってもちゃんと戻ってきそうな気がする、が……

（いや、あの子は私が面倒見なきゃダメだわ。何かあったら一番に私のせいになるから……）

野望と将来を潰さないために、とにかく今は、全て我慢。

(がんばらなきゃ)

小さく、拳を握った。

「せいけんづき？」

「きゃあ?!」

悲鳴をあげたカンシエが視線を落とすと、しゃがみこんだアルマがにこにこしてこつちを見上げていた。
思わず体中の力が抜ける。

「もー、どこ行っちゃってたのさ。まあそこからさらに離れたあたしも悪いけどね」

「驚かさないでよ……面白い道具を見つけてね。……貴方もどこか行ってたの？」

「ごめん、あたしも見つけたのさ、面白いもの」

「そう、なの……欲しいもの、あったの？」

「えーと……いいよ、諦めた。かっこよかったのになー」

「……そう」

「カンシエも諦めたんだ？」

「ええ……考え直してね」

「なんか元気無い？」

「……平気よ」

(こんなに疲れる相手は本当に久しぶりだわ……ついていけない……)

…)

その後、カンシエはなんとか買い物が終わらせ、家についてからは即ゆっくり眠った、とき。

「カンシエーお腹空いたよカーンシエってばー」

「出発は……明日、になりそう、ね……」

5 少女たちとまだ出発できない(後書き)

賢者と剣士は……サブキャラ？ まではいかない、と思います。お
そらく。

魔法概念は出してみたけどまだ魔法使っていない……！

6 少女と燃焼系

「勇者は……」

「たまには外に出たらどうだ？」

「今いいところなの」

「それ以上ふくよかになりたいのなら別に」

「たまには我慢も大事よね。ちょっと外の空気を浴びに行ってくるわ」

「それは良かった」

「おい、ここで何やってんだ？」

「！」

蛇を発見したかのように僕は肩を大きくびくつかせて振り返った。案の定、そこには同級生男子数人がいた。

「聞いてンのか？ あ？」

とつてもガラが悪い。これでも町の女性たちからは『天使様みたいに可愛い』と噂されるのだから世も末だ。とか考えてたら胸ぐらを掴まれた。

「何やってンのかって聞いてンだよ、オイよお」

どうしよう。ここには誰も来ない。

……僕が今までもたれていた家の主以外は。

彼女は残念ながら、今は家の中だ。窓を開けて下を見ない限り、僕には気づかない。

「……なんでも、いいだろ」

「よくねえよ。ここ誰んちだか知らねえとは言わせねえぞ？」

「まさか、惚れてんのか？」

「くくっ」

「ひひひっ」

全く下品にも程がある。

「ありえるかよ。お前みたいなケ」

そいつが、僕の大嫌いなセリフを吐こうとした。
その時、

「……それで満足できるの？」

「何が？」

「ソレ」

アルマが肉叉フォークで指し示したのは、カンシエの皿。

こちらの皿にはパンや肉類等有るのに、カンシエの皿には軽く味付けした野菜しかない。野菜というか……単なる葉っぱの山盛りに見える。カンシエはそれを無表情で噛み続けて飲み込み続ける。

アルマはそれを見てちょっと顔色を悪くした。

「あー、脂肪気にしてるとか？ うーん、カンシエは結構細いと思うけど」

「なんの話よ。私はこれでいいの。元々、そこまで詰め込めないのよ」

「ふむ。でももうちょい食べたなら？ いざつてときに動けないよ？」
「煩いわね。関係ないんだから黙ってなさいよ」

打ち消すように手を振って見せ、カンシエは野菜の皿をアルマへと押しやると、寝ると言って自室へ戻ってしまった。

朝、旅行準備のための買い物に行って戻ってきてから、カンシエはいまいち元気がない。

さっきまで寝ていたのにまた寝に行くし。

「……気分悪そうだなあ。やっぱりあれだよ、Caとらないせいだよ」

実際、カンシエの精神に最も影響を与え続けているのはアルマだが、カンシエが言わないのでアルマはそんなことは知る由もない。そのまま、何事もなかったかのように食事を続ける。

「この野菜っ、……………味無ーい……………」

部屋に入った途端、腹の虫が情けなく鳴る。はあっ、とカンシエは安堵のため息をついた。

アルマの食事を見ていたところ、急に空腹が襲ってきて、腹が鳴る前にここまで逃げてきてしまった。騒動のあった朝も鳴りかけたけ

ど、ついに我慢できなくなつたみたいだ。
腹が減るなんて、本当に久しぶり。

今までは勉強に明け暮れ、まともな食事も睡眠も交友も、人間らしいことは何もかも忘れていたのに。

卒業して、アルマを召喚して、突然、人間としての欲望が戻ってきたらしい。

(……………情けないわよ、私)

ぎゅっと目をつむる。

今までずっとずっと我慢してたのは、なんのため？

全部忘れて、“化物”の称号を獲るために努力してきたのは、なんのため？

まだ目的を達成していないのに、気を緩めてはいけないのに。

(人間らしく、なんか……………)

ぐぎりり。

(……………でも、お腹空いた)

溜め息を吐きつつ、カンシエは荷造りに取り掛かった。

それからしばらくして、部屋の外から小さな音がした。続いて急いで走り去る足音。

それが完全に消えてから、カンシエは扉を開けた。

「……………何よこれ」

そこにあつたのは、皿のなかに卵。しかも一個。なんて奇妙な光景だろう。

一体誰が、ってアルマ以外に有り得ないが、一体どうして卵一個を置きに来たのやら。

カンシエは卵を拾い上げ、じっくり見つめた。一つ溜め息をつき、それを部屋へと持ち込んだ。

その頃、アルマはにこにこ笑いながら荷物を引っくり返していた。

「きつと喜んでるはずだよね、カンシエ。いくらダイエット中だからって、食べたいなら食べなきゃ精神的にダメじゃない。ねえ」

彼女はあの卵一個でカンシエが喜ぶと信じきっている。

自分は卵が好きだから、カンシエも喜ぶに違いない。ってそんな訳はないが、アルマの脳内にそこまでの思いやりはない。いつでもどこでも傍若無人、奇妙奇手烈なのは自覚している。ただし迷惑だという自覚はない。

というかカンシエはダイエットなんかしてないのだが。

「成長期なんだし……おりよ？」

ドアがノックされた。返事をする、ふらふらと無表情のカンシエが入ってきた。

「ちょっといい」

「なに？」

「あの卵、……」
「うん、おいしかった？ 一番栄養と鶏の愛情がこもってそうなやつを選んだんだけど」
「卵なんてどれも同じよ。どうして置きに来たのよ。私は食べたいなんて言っていないわよ」
「でもお腹は空いてるでしょ？ 食べないとイライラするよ」
「貴方には関係ないじゃない」
「でも食べたんでしょ？」
「……た、べたわよ、しょうがないから」
「よかった」

そうして和やかに笑うアルマの意図がカンシエには掴めない。勝手に持って来られたのは勘に触ったが、少しは心配されているのかもしれないと思うとあまり悪い気はしない。

「空腹だと思うならどうして卵一個だけだったの」
「あとは食べちゃったもん」
「……」

和んで早々、何故だか凄く殴りたい。

「どうやって食べたの？ ゆで卵、目玉焼き、卵焼き？」
「焼き卵」
「……卵焼き？」
「焼き卵よ。ほら、卵を丸焼きにして割って食べるの」
「卵丸焼きとか聞いたことない」

確か、卵を加熱すると爆発するとか聞いたが。

異文化コミュニケーション、だと思いたい。
聞かなかったことにして、アルマはひっくり返した荷物を並べる。

「何やってるのよ」

「うむ、なんだかわくわくしてね、遠足前夜みたいだ」

「……よかったわね。忘れていかないでよ」

「てかさ、食べ物とか着替えとかどうするの？ 食べ物はそのちに任せるけどあたしは着替え持ってないし」

「保存のきくものを持ってくわ。足りなくなったら途中で調達するし。衣服は私のを貸すわよ」

「んじゃ、お金は十分なの？」

「一応、貯めてあることはあるけど、なくなったらなんとかして稼ぐわよ」

「か、稼ぐ、ねえ……魔法使いの稼ぐ、ってよくわからないけど」

「あなたは私が送り届けなきゃならないのだし、できるだけ不自由にはさせないつもりよ」

「そう。ありがとうねー」

軽い礼の言葉に溜め息が出る。

金を出してもらってる身でありながら、本当に偉そうだ。もっと感謝されなければ割に合わない。

いやしかし、アルマは全く違うどこかから来たのだから、仕様がな。魔法が使えないなんて、なんて不便なところに住んでいたのだろう。

「まああたしは首都まで連行されるわけだし」

（我慢、我慢）

「あ、でもあたし何もできないから護衛と言った方がいいか」

（……我慢）

「しつかり守ってねー」

びぎん。

「貴方……」

「おうえ？」

カンシエは隠していたものを後ろから出した。

それは、六本の弦が張られた楽器だった。

抱えるようにして構えるのを見て、アルマが首をかしげた。

「あーっと……リユート？」

「そんなに私を怒らせたいのね」

「え、え？　ちよっと、カン、カンシエさん？」

白い指が弦を弾く。

アルマは今までに感じたことのない嫌な予感がして、急いで立ち上がった。

カンシエの口から、低く静かな声がこぼれた。

「……大気の中の炎の素よ」

「あの、カンシエ？　ひよっとして怒」

「弾ける炎！」

「ああう？！」

咄嗟に横に跳んでかわしたアルマは壁に激突した。が、それで済んで良かったとすぐに思うことになった。

カンシエの目の前に赤い小さな粒がたくさん集まり、次の瞬間、大

きな火の玉が放たれる。燃え盛るそれは派手な音をたてながら、開け放たれていた窓から飛び出した。窓に飾られていた花と花瓶が焼け、そのままの勢いで火の玉もろとも窓の外へ飛び出していった。

「いつてえ！ あっ、熱っあっつあああっ！」
「てんめえ！」

なにやら怒号が聞こえてくる。

「……………下の人ごめんなさい」
「……………」
「あっ、カンシエ、ごごごめんなさい！ お願いだからあたしを焼かないで！ 美味しくないよ！」
「うるさい」
「すいません……………あたし謝ってばっかじゃん。ていうか何かした？ あたし……………」

本気で不思議そうにするアルマに脱力する。何も言わずにカンシエは深く深く溜め息をつき、楽器を片手に握り締めて、部屋から出ていこうとした。

その背中に明るい声が投げかけられる。

「そーだ、ご夕飯は一緒だかねー」

「……………」

それを聞いたカンシエの頬が、アルマには見えないように、僅かに緩んだ。

「焦った顔が見られただけでも大収穫だわ」

「え？」

もしかしたら、意外と、疲れるだけではないのかもしれない。

カンシエが出て行き、そうして部屋には、顔を押しさえるアルマが残された。

結局、カンシエが魔法を放った原因はアルマには解らずじまいだった。

「……………あの、カーテンと花瓶……………」

助かったんだろうか。

窓を見上げ、少しだけ微笑んでみた。

これも神様のご加、

「何笑ってんだてめえ！」

「ぐ」

ぐぼえ。

6 少女と燃焼系（後書き）

彼はストーカーではありません。ただの純愛です。
アルマ以外苦勞人ばかりな気がする。彼女が苦勞かけさせてるんです。

7 少女たちと出発と彼女

「始まりはその夜からだった。気が付けば、絵にも描けないほどのえもいわれぬ美しい女が、私の血を吸っていた……それは私の新たな人生の始まりであった。しかし、獲物に牙を突き立てることに未だに慣れない……」

……人って、どんな味がするのかしら」

「ねえ、カンシエ」

「何よ」

「さっきから皆さんの視線が痛いよ」

「そりゃ、そうでしょうね」

「どうして？」

(どうして、じゃないわよ、全く……)

突如として何処からともなく現れ、奇行を繰り返す少女。

そんな奇妙な少女が非の打ち所の無い優秀な首席(自称/自重)カンシエに絡んでいるのだから、奇異の目が集まらないわけがない。

「只でさえ、貴方、黒いもの」

「ん、黒？ そういえばこの町は黒髪が少ないよね」

「この町だけじゃないわ。この国は何処へ行ったって黒い髪はいないわよ」

「それこそ、処変われば、というやつだね。あたしの国は皆黒髪だったし」

「それは不気味でしょうね」

「あたしからすればこっちのが不気味なんだけどな」

(貴方は存在自体が不気味以上なのよ)

とは、言わない。

早朝。現在二人は、魔法街メイギアの大通りを連れ立って歩いている。理由は一つ、漸くやってきた出立のため。

黒髪と白い服を翻してとたとた歩くアルマにとってはわくわくするような未知への旅立ち。

灰髪と茶色のローブを垂らしてとぼとぼ歩くカンシエにとっては不安しかない無限地獄の始まり。

アルマはくるくる回ったりよろめいたり手を振ったり鼻唄を歌ったりと賑やかに忙しい。後ろをついていくカンシエは恥ずかしいやら無いが、どうせ何カ月も帰らないのだろうし、ならば今どう思われたって構うものか、と開き直り始めていた。

「そうだ、カンシエ」

「今度は何」

「あたし、知り合って数日経つてのに、カンシエについて全然知らないんだよ。これっておかしいよね。とりあえず色々尋問している?」

「私のことなんか知ってどうしようってのよ」

「仲良くなりたい」

「……」

「ねえカンシエー？ カンシエってばー」

確かに、アルマはカンシエ自身のこととはつゆとも尋ねなかった。あの忌まわしい傷跡のことも。

別に仲良くなどならなくとも旅は続けられそうだが、カンシエはアルマの提案を受け入れた。答えなければ煩いし、門に辿り着くまでにはまだ暇があるし、

(別に、聞かれて痛いことではないし)

「少しだけならいいわ。答えられる範囲ならね。何が訊きたいのよ」

「じゃ、そうだなあ、カンシエの家族構成とか」

「私の家族？」

(もう、誰もいないに等しいわね)

両親の死の悲しみは忘れてしまった。悲しむ暇もなかったと言ってもいい。

今更悲しみ直す必要はない。今や悲しみは、復讐心に支配されているから。

(あいつへの復讐……)

僅かに顔をしかめたカンシエには気づかず、アルマは勝手に一人で話し続ける。

「あたしは家族いないからー、一人で過ごしてるんだよ。寂しいよ

ね、一人は」

「ふうん……」

なら、二人の境遇はある意味似ている。ただし、両親がいなくなつたその後の境遇と今の心境は全く別方向に枝分かれしたらしい。

「一人つて楽しいよね。何やっても誰も気にも留めないの。気が楽で楽でしょーがないっ」

「そうね」

（軽いわよね、アルマは）

一人だというのに悲しみや怒りに惑わされず、あくまでも楽観的に別に、必ず悲しまねばならないというわけではないが、それでも少し奇妙ではあった。

反対にカンシエは、悲しんでこそいないが、いつでも復讐心に支配されたまま動いてきた。誰にも感情を悟られないように、いつでも冷淡な態度を崩さなかった。

「一人より二人、二人より四人」

（ああ、煩いわね……）

アルマとは根本から違う。理解ができない。しようとも思わない。したところで首都への旅でなんらかの得になるとは思えない。だからカンシエは、アルマと仲良くする気なんてなかった。

そんなアルマはうむーと唸りながら頭に指を当てて少し考えた後、ぼすぼすとカンシエの肩を叩いた。

露骨に嫌な顔をされているが例のごとく全然気にしていない。

「なんかいまいちだね。もっと明るい話をしよう、ね。えっとじゃあ……カンシエの好きな男の子のタイプとか聞かせてもらいたいですな」

「馬鹿にしてるわけ？」

「え、どうして？ 女の子どうしだしこんな話題が普通かなと思っただけだ」

「……答えたくない」

「ん、そう。因みにあたしはねー」

「聞きたくない」

「うえーい。話にならないよ？」

「答えられる範囲って言ったはずよ」

……なんでこんな子を召喚したんだろう。

答えの出ないことをまた考える。

きつと首都に着けば何もかも明かされる。絶対に。明かされないはずが無い。

(明かされないなら私が無理やり解明してやるまでよ)

「あれ、カンシエの家族構成教えてもらってなかった」

「ああ、門が見えたわね」

「うっそ?! まだ全然きいてないのに」

「後からでも時間は、それこそ死ぬほどでもあるわよ」

「ん、そうだね……死ななきゃあいくらでもあるか」

門の前で、アルマは立ち止まった。街を囲む壁はとても高く、登れそうな足場はないし、余程技術と体力がないと乗り越えることは難しそうだった。にも関わらず門に門番はいない。

「うん？ 普通ファンタジーでは門番がいるんじゃない……」

想像と違ったアルマは、少し頭に指を当てて考える。

（きつと何かの因子により侵入者がいないか、侵入されたことがないかのどっちかなんだろな）

「うん？ あ、そか、魔法ならなんでもアリか……平和なんだなあ。さすがは魔法の世界、羨ましい限りだねー」

得心がいつてうんうんと頷き、アルマはカンシエを追って再び歩き出した。

「あつちではいつもいつも……ふふっ、まあいいか」

口元に浮かんだかすかな笑いは誰にも気づかれずに。

先に進んでいたカンシエが門を押し、アルマを振り向く。

「じゃ、出るわよ」

「え、あれ、もう？ 故郷にお別れとかは？」

「町に別れ告げてどうするのよ。人じゃないのよ」

「だったら人だ。学校の友達とか近所の人とかは？」

「……別に、また帰ってこればいいじゃない」

両方とも不思議そうな顔をする。その均衡を先に破ったのはアルマ。いつもの笑顔に戻り、頷いた。

「ん、それも悪くないね。あたしそーいうの好きだよ」

「は？」

「さ、行こ行こ」

「ちよつと、どついう意味なのよ」

「よつしやあ冒険の第一歩」

僅かに開いていた門を体当たりするように開き、アルマは一步を踏み出した。

その後に、カンシエが溜め息をつきつつ、続いて歩き出した。

門を出ると、一面の草原が広がっていた。青空と草原の境界に向かって、一本の道がどこまでもどこまでも続いている

と、いうのをアルマは想像していたのだが、現実はず違った。

実際は草はほとんど生えておらず、固い土が町の周りにどこまでもどこまでも広がっている。

啞然とするアルマを不審な目で見ながら、カンシエが説明する。

「町を造つたとき、要らないところの草木は全て燃やしたのよ」

「うあ、幻想のカケラもないことを言われた」

「ふあ……何が衝撃だったのかは知らないけど、しばらく歩けば草原になつてゐるわ」

そこでカンシエは心底嫌そうな顔で溜め息をついた。

「全く、この長い長い道程をずっと徒歩ですって！ この魔法文明になんておかしいのかしら」

「嫌ならなんらかの移動手段使えばいいじゃん」

「だって、あの方々に徒歩って指定されたもの」

「……………ああ、うん、カンシエってそういう……………優等生タイプだね、マジで」

「今更何を言っているの？」

アルマから見て、カンシエは物凄く細い。アルマも細いが、アルマを鹿とすればカンシエは枝だ。家でも草類ばかり食べていたが、栄養が全く足りていない。加えて体育のような授業がないなら、枝のような身体になっても仕方がない。

焼き卵は……………やっぱり、栄養摂れないだろう。

固い土を踏みしめて歩きながら、二人は話し続ける。

「得意教科はなんだったの？ いや、どれもだろっけど、特に興味があつたヤツとか」

「実践的な魔法……………簡単に言えば、戦術？」

「……………せ、戦術？」

「戦術、って普通でしょ」

「普通、かな？」

「やらなきゃやられる、って言うじゃない」

「いや、そうなんだけどさ……………うーん、やっぱり魔法ってそういう魔法、なんだなあ……………」

「何よ」

「うん、どんどん夢が壊れていくなあ、って」

あははあ、と少々投げ捨て気味に笑うアルマにカンシエは訝しげな顔を向ける。

ファンタジー
まさに幻想が現実であるカンシエには一生解らないだろう。

「貴女だつて自己防衛くらいは出来るでしょう」

「え、できない」

「え？」

「生まれてから今の今までただの一度も見たこともない魔法などという概念にどう対抗しろと言っんだい、お嬢さん」

「……………ああ、深刻ね」

「……………うん、全くな」

すっかり習慣化した溜め息をつきつつ、カンシエは懐の短剣に手をやった。

アルマも自分の短剣を取り出す。端っこについた装飾が小さく音を立てる。

「貴女、せめてこれくらいは扱えるわよね？」

「相手によるかな。ていうか、とりあえず斬ればいいんでしょう？」

「簡単です」

「まあ、いいんだけど。なら学校で何を習ってきたのよ」

「や、こっちはもともとそっういう学校じゃないんだけど。飛び道具ならよくやったな」

「飛び道具？　つて、……………弓矢？　貴女が？」

「あえて突っ込まないよ。銃だよ、ハンドガン拳銃」

両手で撃つ真似をするアルマにカンシエが顔をひきつらせた。

かなり恐怖しているように見えるが、アルマは主にゲーセンでそれを使っていただけで。

「あんな危険なものを？ 余程恐ろしいところにいたのね……」
「危険じゃないでしょ。街でも売ってたし、皆持つてるものじゃないの？」

「数は少ないわよ。あんなの、危険だわ。詠唱を中断されるもの。あんなのがあつたら魔法使いは安心して魔法を使えないじゃない」
「……それは困ったねえ。……ほんつと平和な世界だなー、つと

両腕を空に突き上げて、アルマは大きく体を伸ばした。
カンシエは空を見上げて、太陽の眩しさに目を覆った。

「さて、まずはどこに行くの、相棒？」

「やめて、気味悪い」

抜けるような青空の下、白と茶色が長い道を進んでいく。

その光景が、上から見下ろされる形で目の前に映し出されている。
見ているのは、白い女と黒い男。

「………ようやく動き出しましたね。まったく、準備というのはこんなにかかるものですか？」

「お前の場合は召使がなんでも用意するだろうからな。金にも困らないだろうし」

「………？」

「無理に想像しなくていい」

貴族の令嬢だった女は首を傾げる。男は苦笑して、光景に目を向ける。

「うまく説明したものだ。これで、一応は彼女に危険は及ばないというわけか」

「ええ。まだこれからですけどね。この世界で、彼女のような人間への風当たりはあまりにも強すぎます」

「それはそうだろう。ここでは魔法は呼吸とほぼ同意語だからな」

「いつでも、人は考えの異なるものとは相容れることを拒みますね。悲しいこと」

「それをどうにかするのが、これからの我々の目的だな」

「ええ。彼女たちを解放しなければ。すべてを正しく、元の形に戻さなければ」

そう言つて、女は穏やかに笑つた。全てを受け入れる慈母のような笑顔。しかし、『間違っているもの』は決して受け入れることの無い非情の笑顔。

「皆を救わなければ。それこそが私の使命、そうですね」

「勿論、それこそがお前の究極の使命だ」

小さな女の子に言い聞かせるように、優しく男は言った。

7 少女たちと出発と彼女（後書き）

お互いにお互いを知らないまま仲良くすることは難しいと思います。
アルマはゾンビを撃つようなシューティングが大得意です。

8 少女と女帝（前書き）

グロテスク？

8 少女と女帝

「王女様は勇者を愛しました。けれど女王はそれを許さず、勇者を殺そうとしました。王女様は少女と手をつないだ勇者を逃がし、自分が罰を受けたのでした。」

……………さて、誰が悪いのかしら？」

「カンシエー」

「うるさいわね、さっさと寝たら」

「カンシエの話聞きたいんだけど」

「また聞きたいの？ 昨日も一昨日もしてあげたじゃない」

草むらの中、布に包まって野宿する二人がいた。

カンシエはあまり気にしていないが、アルマは屋根の無いところで寝ることはあまりなかった。

畢竟、そう簡単には眠りにつけず、六日経っても未だに慣れなかった。

「寝れないんだよう……………お母さんが子供にする感じで、何か話してよ」

「家族の話と魔法の話をしたわね。私だって、そうそう話せることが思いつけるわけじゃないのだけれど……………」

「じゃあじゃあ、カンシエの学校の話をして。自慢話でも全然いいから」

「学校……あ、いい話があるわ。子守唄代わりにでも聞いてなさい」
「ほんと？　ありがとうー。じゃあお願い」

旅の連れが期待を膨らませてこちらに耳を向けたのを待って、カンシエはそつと笑った。

二日連続、眠いのを我慢して無理やりに話させられたのだから、少しくらいは懲りてほしい。

「それはね、私が学校に通ってたころの話で……」

「ねえ、聞いた？　今回の満点」

「聞いたよ。『また』なんだろう？」

「つつつかさ、いつもだよな」

「毎回満点しかとらないとかさ……」

教室の隅でしゃべっていた生徒たちは、着席している一人の少女に注目していた。

灰色の髪。ひとつの汚れも乱れも無い制服。彼女はその鋭い目を今は本に向けていた。その頭の半分では本を読んでいるが、もう半分ではまったく別のことを考えていた。

（また私のことだ）

正直鬱陶しかった。毎日のようにこつちを見てはぎりぎり聞き取れない声で囁きあう生徒たち。もつと建設的な話をすれば良いのに。その無遠慮な生徒たちの話題は自分のすばらしい功績のことであったが、嬉しさはなかった。

「毎回毎回、ご苦労なことだよ」

「なんか、ここまでやられるとさ……気味悪いっつうか」

「半分くらい化物なんじゃないの」

自分は『優等生』だった。毎回満点を取り、授業も真面目に受け、宿題を出さなかったことは無い。

なんの問題もない、すばらしい生徒だった。誰も敵わなかった。

友達はいないけれど、どうでもよかった。友達で成績は上がらない。全て自分ひとりでやるしかない。

奴らは鬱陶しい。努力もしないくせに自分の優秀さをただ恨むだけで。

どうして努力しないのだろう。どうして勝とうと思わないのだろう。自分に悪いところなど無いのに、どうして非難されなければならぬ？

奴らのせいで学校に行くのが億劫だった。でも、行かなければならない。自分は『優等生』だから。

あんなのを気にしてはしょうがない。実際はぐちぐちとうるさいだけで何もして来ないのだから、単なる蜂の羽音くらいに考えられない。あんな愚かで可哀相な生き物たちは踏み台にもなりはしない。役に立たない者は必要ない。

始まりは、そんな暗いことばかり考えていたある日のことだった。

「……………？」

読み続ける本に何か違和感を感じた。ぱらぱらとページを進めてみると、あるページに何か挟まれている。自分で挟んだ覚えはない。取り出してみると、それは小さい紙切れだった。そっと開いてみる

と、殴り書きで文字が書いてあった。

『ばけもの』

パンツ！

「わ!?!」

いきなり大きな音がして、思わず顔を両腕で覆ってしまった。目を開けながら腕を下ろすと、そこに紙は無かった。ふと、読みかけの本に目を落とした瞬間、さっきまで酷く冷めていた気持ちが一瞬に熱を持った。

「……………」

本には、赤い液体がこぼれたシミがいくつも浮かび、まるで血を撒き散らしたかのようになっていた。

嫌な光景が頭を勝手に占領する。

光る刃、滴る血、腐った臭い。哄笑。悲鳴。
殺さなければならぬ相手。

笑い声が聞こえる。

一人の男子生徒が教室を出て行った。
少し間を置いて、次に彼女が出て行った。

しばらくして、彼女だけが帰ってきた。同時に先生が教室に入ってくる。

「はいはい、席に着きなさいね。今日は水の素の魔法です。それでは実践してみましょう。ここに水槽があります。そこへ、この、先ほど教室の前で拾った蛙を放します」

嫌がって激しく暴れる蛙を押さえつけ、先生は水槽に蛙を放り込む。深い水槽の中、蛙は飛び跳ねて出て行くことができず、跳ね回っては壁に激突する。

先生が水槽に杖を向けた。

「そして、詠唱。想像するのは刃です。……水よ、諸刃の剣と化せ」

水が一瞬、ゆらめいた。

次の瞬間、水槽から、嫌な音がした。

飛び跳ねる音が消えた水槽の水は、真っ赤に染まった。

周囲から驚きの声上がる中で、彼女は静かにそれを眺め、口元に笑みを浮かべた。

「……哀れだわ。本当に、哀れ」

男子生徒は、ついに戻ってこなかった。

一度、教師側は搜索をしたようだが……なぜか、それは打ち切られ、二度と誰の口に昇ることも無かった。

「それでその後も、実験に動物を扱う授業前に生徒が行方不明になる事件が多発したのよ」

「……………ふうん」

「生徒たちは、なぜかそれは私が逆恨みでやってるんだって噂し始めてね。六人も犠牲になったころには、ありがたいことに私の近くでおかしな行動をする人もまた消えたわ」

「……………陰険」

「誰が？」

「なんでもないっ……………この女王、いや女帝め」

「あら、私は化物で十分よ？ 先生方からもとっても期待されていたしね」

「あ……………だからカンシエって学校にいられたんだ……………イヤな人だ」

「……………どういう意味かしら」

カンシエは涼しい顔で、空を仰いだ。

今日も気持ちの良い快晴。これから暑くなる。

連れは後ろからなぜか元気をなくしてとぼとぼとついてくる。

「あーあ、聞くんじやなかった……………結局眠り浅かったし」

「本当に面倒よね。思わない、実力の差があるってことをまるで理解していない人が多すぎるって」

「……………んー、それってさあ、理解してるからそういう嫌がらせしてくんじやない？ どうしても乗り越えられないと解ってるから、そうやって少しでも相手を揺らがせないと居ても立ってもいられないってこともあるもんだよ」

珍しく適當ではない返事をしてきた連れを振り返ると、カンシエは首をかしげて問うた。

「貴女も乗り越えられない何かとても恐ろしい存在を持っているの？」

すると連れは、これまた珍しく歯切れの悪い返事をした。

「いや、あたしは、そうじゃないけど……乗り越える前に、辿り着けずらできないヤツっての、いるよね、ってこと」

「あら、貴女に乗り越えられるものと辿り着けないものの区別ができるとは思えないんだけど」

「うわ、今、優等生様にめっちゃくちや馬鹿にされたような……ま、どうでもいいじゃん、そんなこと」

「そうね、少なくともこの世界では、貴女より私のほうがよっぽど知恵者なものね」

「あー、それはしょーがない事実だけど……けどさカンシエ、あんまりそうやって実力実力言わないほうがいいときもあるんだよ」

「事実でしょう？」

「そうだけど、でもねえ」

がんばって足を動かし、開いていた距離を詰めてカンシエの横に辿り着いたアルマは、連れの顔を覗き込み、複雑な顔でつぶやいた。

「人それぞれ、他人に乗り越えさせられない実力ってね、あるからさ」

それに大きく目を見開いたカンシエは、大きく揺れた感情に任せて怒鳴ろうとして……やめた。

(それは、貴女が私より秀でていて何かを持っているってことなのね)

ゆづべから気分が良いので、別の返し方にする。
薄く微笑んで、前を向いて何気なくつぶやいた。

「明日は蛙の死骸が降るかもね」

「……先生、ここに魔女がいまーす!」

「それがどうかしたの? ここには魔女だって何だって腐るほどいるのよ? 貴女以外はね」

「うわああああ、あたしってかなり危ないところにいるんだって今更実感しました」

「かなり遅いわよ」

「ところでそろそろ村に着かないと両方ともつぶれた蛙どころじゃ済まなくなるけど」

「わかったわ、じゃあさっさと向かいましょう」

「ああっ待ってよ、あたし調子悪くって早歩きはちょっと

……」

(この子にも、揺るがせたいものっているのかしらね)

この広い世界で、いきがっている馬鹿は自分。わかっている。このままでは何かに足をすくわれることだってありうることも。

けれど、なんでもいい、誰かよりも実力を持っているからこそ、一歩前に出たいもので。

(まだ、私は上にいけるはずだわ)

いや、今はそれより、

(焼き卵が食べたい)

ゆるやかな坂道になるころ、ようやく、いくつかの屋根が見えてきた。

一息をつき、カンシエは両腕を上げて体を伸ばす。そうして、どつどつと、とついてくる連れを待った。

8 少女と女帝（後書き）

カンシエ様の嫌がらせ脱出のための逸話でした。真似できない、そこに痺れる憧れる。

六日間も歩かせていて本当にごめんなさい。キャンプしたこと無いので良く分からないんです。

9 少女たちと田舎に泊まる

「勇者は村へと辿り着きました。ところが、その村は勇者を陥れるための罠だったのです。勇者は仲間と力をあわせ、降り注ぐいかづちを退けたのでした。

きつと、勇者がいつまでも世界を救わないから苛立っていたのね。でもそれじゃあ物語が面白くないし。勇者って難しいわ」

村の前で、急に立ち止まった連れをアルマは振り返った。

夕日に照らされ、黒い影のような連れはどんな顔をしているのやら。

「どしたの、早く村に入ろうよ、カンシエ」

「ええ……そうね」

こっそりと、軽く唇を噛み、カンシエは石壁の中へと足を踏み入れた。

静かな村だった。あちこちに大きめの家があり、その間にわずかに民家が点在している。

「ん……あんたらは？」

村の入り口で椅子に座っていた一人の老翁が声をかけた。カンシエは老翁を見つめてはきはきと答えた。

「私たちはメイギアから来た旅人です。この村で休息をとりたいのですが、宿はございますか？」

「ああ、あるよ。しかし、町から来たあんたらにとつちや、かなり小さいだろうなあ……」

「構いません。寝ることさえできればどこでもありがたいですから」「そうかい。ならいいが……馬はどこにいる？ 若い者に牽かせよう」

老翁の言葉に、アルマはちよつと首をかしげ、カンシエはしばし固まってから、ああ、と声を発した。

「馬は使ってません。歩いてきました」

「歩いて？ 歩いて……メイギアから?! 驚いたなあ、あんたらみたいな……あー」

そこで老翁は口ごもったが、カンシエは視線に冷たいものを含ませながら冷静に返した。

「事情がありました。それに、私は歩き旅には慣れていきますから」

宿に入るとすぐに食堂になっていた。人間がある意味苦手なカンシ

エは活気にわずかに顔をしかめ、連れの腕を力いっぱい引つ張り、振り返ってはひそひそと話す人々の間を早足で抜けた。

席に着くと、アルマがきよろきよろとあたりを見回した。

「やめなさいよ、別に珍しいことでもないでしょう」

「いや、だって、メニューがないし」

「めにゅーって何よ」

「……………お品書き？」

「おしながきって何？」

「あれ、おかしいな、通じないよ」

「ちよっと、私を馬鹿にするとどうなるか分かっているんでしょ
ね」

「してないよ？ ちよっと被害妄想に捕らわれすぎじゃない、カン
シエ」

そこへ、大柄な女性がくすくす笑いながら近づいてきた。

エプロン姿、ということはおそらく食堂の給仕だろう。

「元気ねえ。この村じゃ最近見ないわ、あんたみたいに元気な子供
って」

「あまり褒めないでやってください。調子に乗るとうるさいだけで
すから」

「なんかまた馬鹿にされた気がするけど空腹だから何も言わないで
おくよ。パンありますか？」

カンシエ曰く、食堂の料理は頼んで可能なものならなんでも出して
くれるという。料金は材料によって決まるらしい。

カンシエは注文を言ってから頭に手を当てて休み、その間にアルマ
は自分の分を女性に注文した。

勿論払うのはカンシエなので、ほどほどにしておくようにと言ってはいるが、アルマの様子からすると全く気にしていない。なんでもいい、という言葉のせいか目を輝かせながら注文をしている。実によくない。

女性が行ってから、アルマは食卓に頭と両腕を乗せ、顔をくっつけた。

「あー、久しぶりの椅子とテーブルだ……足が棒になるとこだったよ。大体さあ、女の子が朝から晩まで歩き詰めとかどーいうこと？」

おじいさんも言ってたけど、馬あるなら使つてよ！」

「私、馬に乗ったこと無いの」

「あ、あたしも無いや。じゃあ、馬車は？」

「だって、徒歩で来いって言われたんだもの」

「……………だから？」

「だから、徒歩で行くんじゃない。何か文句があるの」

「……………なんであの人の言ったこと遵守してんのさ」

「決まってるわ。ちゃんと言われたとおりに遂行すれば、首都に着いたときに私の待遇が良くなるかもしれないじゃない。言われたとおりにしなくって待遇が悪くなるのも困るしね」

「わあ、すばらしい自己中、さっすがは優等生様！ あたしにできないことを平然と言つてのける！ ……ああ、お腹空いた」

「あまり騒がないほうがいいんじゃない？」

カンシエは食卓に肘をついて、そこに頭を乗せている。食卓に寝そべったアルマがその肘に手を伸ばしてちよっと掴もうとしたが、一瞬の差でカンシエの方が素早かった。アルマの手の甲に肘の骨を突き刺さん勢いでぶつける。

ちよつとくぐもつたうめき声が聞こえた。

周りから少し笑いが起きた。

そんなことをやっている二人のところに、一人の男が近づいてきた。

「あの、君さ」

「……ああ、私ですか？」

首をかしげてカンシエが男を見上げた。男は少女の顔に顔を近づけ、まじまじと見る。

その浅黒い顔から、カンシエは少し引いた。その引きつった顔を、アルマはぼんやり下から見上げる。

「楽器……って、君、吟遊詩人でもやってるのかい？」

「いえ、私は、いたって普通の魔法使いですが……あの、何の御用でしょうか？」

「君さ、昔、この村に来なかった？」

「え？」

「そうだな……五、六年前だったかな。小さな男の子と女の子がこの村に来てね。メイギアから来たって言うってたっけ」

「……はあ」

興味のなさそうな声で返事をし、カンシエは続きを促す。

男はさらにカンシエに顔を近づけ、話を続けた。

「その時の女の子が君に似ていたんだけど……あー、気のせいだった。よく見たら、顔つきも髪の色も全然違ってるし」

「え、よく見なくてもわかんないの、それって」

アルマの突っ込みは完全にスルーし、カンシエは男から顔をそらした。

「そうですか。じゃあ私にはもう用はないはずですよ。ならどい

てください、この子が待ち望んでる物が来ませんので」

男が振り返ると、料理を持った女性が笑顔で立っていた。軽く頭を下げ、男は自分の席へと戻っていった。

「なんだよなんだよ、お前ってそういう趣味あったわけ？」

「違うっての。ホントに似てた気がしたんだけどなあ……なあ、お前だって似てるって言ってたよな」

「ああ……けど、違ったんだろ？」

「違う……と、思う。あの時の子はおどおどしてたけど、あの子は全然違うしな」

「だよなあ、滅茶苦茶可愛いよなあの子！」

「いや、そういう意味じゃないんだけど。まあ、可愛いけどな！」

「にしても、あの黒髪の子って……」

「（あっちでなんか言われてるけど）まあいいか！ いただきます！」

「貴女って、食べるときはやけに嬉しそうね。そんなに嬉しいものなの？」

「嬉しいよ。今まで味気ないものばかりだったし。カンシエみたいに草だけ噛んでれば生きてける仙人系女子とは違うのー」

「道の途中でまともなものを要求するほうがおかしいのよ。あと私は牛や馬とは違うわ」

「とか言いながらまーた野菜のみじゃない」

早速食べ物に噛み付いた連れから少し距離を置いて、カンシエも自分の野菜に手をつけた。

あまり美味しくなさそうに食べるカンシエをじいつと見て、アルマは、ふと浮かんだ疑問を口にした。

「そっぴやさつきの人、ホントに見覚えなかったわけ？」

「ええ、無いわ」

「そうかあ……まいつか。なんにせよ、少なくともカンシエがここに来た事ある確率はそこそ高いって判ったし」

「どうしてそう思うのよ」

「カンシエ、言ってたでしょ、歩き旅に慣れてるって。だから昔メイギアから歩いてここらまで来た事あったのかなあ、と思ったただけだけ。意外とタフなんだね」

「……………」

フォークで野菜を突き刺したカンシエが、それをそのままアルマの口へと突っ込んだ。

肉を嚙んでいる最中だったアルマは野菜に驚いて肉を喉に詰まらせ、慌てて水で流し込んだ。

「貴女には、関係の無いことよ」

「だからやり返し方が陰険なんだったば」

「予想はしてたけど、いざその状況に立たされるとやっぱり頭にくるわね」

「ん、何が？」

「ここは家ではなく宿。」

高い金を払わなければ、部屋は分かれる。
旅を始めたばかりの今、高い金を払うことはできない。
というわけで。

「同じ部屋でベッドが一つなだけじゃない」

「それでなんでそんなに嬉しそうなのよ貴女は」

思わず楽器へと手が伸びるが、まさか人様の建物内で魔法をぶつ放すわけにはいかない。

いやに上機嫌で布団の上をごろごろ転がる連れを忌々しげに睨みつけ、カンシエは今までに無いくらい乱暴にため息をついた。

「なんだかわくわくするな」

「……変態に片足を突っ込んでるわよ」

不気味な笑い声を上げるアルマからかなりの距離を置いたところから、カンシエは片手を差し出した。

「布団を一枚よこしなさい。私は床で眠るわ」

「一緒に寝ないの？ あたしたち親友じゃない」

「寝ぼけているのならさっさと寝なさい。貴女とそんなに親しくした覚えは無いわよ。同衾まで許した覚えも無いわ」

「どこのお嬢様ですかアナタは。ちゃんと柔らかいところで寝ようよ。そりゃちよつとばかし硬いけど、今までは地面で寝てたんだし、今のうちに普通のベッドで寝なきゃ疲れ取れないよ」

「私は慣れてる、って言ったわよね。別に私は一週間だろうが十日だろうが寝なくても割りと平気よ、今までそういう生活だったんだもの」

「わあ、不健康優良児がここにいるよ。ダメだよあたしが許さないから。んー、もしあたしが床で寝たらカンシエは布団に」

そうアルマが口走った瞬間、カンシエはにっこり笑って早足でアルマに近づいた。

「あらいいの？ 気が利くのね。それじゃあいただくわ」
「へ？」

一番上の布団が力いっぱい引っぺがされた。そのままアルマは勢いよく床に投げ出され、いやというほど体を打つ。そこに布団が一枚、無情に投げつけられる。

布団をめくってアルマが顔を出すと、既にカンシエはローブを脱いで布団にくるまっていた。

その背中に向かってアルマは布団の中から抗議してみた。

「ちょっと、これ酷くない？ 本当にカンシエって乱暴というか横暴というか陰険というか……」

「……」
「あー……カンシエ？」

「……」
「…… オヤスミナサイ」

「……」
「……」
「…… しくしく」

すすり泣きを聞きながら、カンシエは布団の中で徐々に夢見が悪くなりそうだとため息をついた。

「……………」

あいつが何かしゃべっている。カンシエはそれを見上げて、震えながら何か返事をした。

あいつの額に青筋が浮いた。息を呑んだ次の瞬間、カンシエは胸に衝撃を受け、地面に倒れ伏した。

あいつが足を下ろす。周りで見ていた人たちは、何も言わずに離れていく。

あいつは動けないカンシエを小脇に抱え、駆け足で村を抜け、そのまま走り去った。

恐怖と痛みで震え上がるカンシエが、そこにいた。そして、ここにも。

「あ……………」

目を覚ますと、じっとりと汗をかいていた。心臓がうるさいくらいに拍動している。

久々に昔のことを夢に見た。今まではあいつの笑い声が聞こえるくらいだったが、それだけでもとてつもない恐怖を感じていたというのに。

安心なんてできるはずがない。どこにいたって、何をしていたって。あいつは心に巣食っていて、いつもいつも飛び出す機会を狙っている。カンシエを壊すために。血と、刃と、笑い声。

予想はしていたけれど、到底、愉快的旅になりそうもない。

「……………アルマ」

愉快な旅の連れは、カンシエの状態なんて知る由も無く、一枚限りの布団にくるまって規則正しい寝息を立てて熟睡している。悔しいけれど、この存在は旅において少しとはいえ支えになっている。このくらい明るくてうるさい連れがいなければ、心のあいつを無視しての旅路はかなわなかっただろう。その連れは涎を垂らしてむにゃむにゃと寝言を言っている。

ひくり、と頬を引きつらせ、カンシエは楽器に手を伸ばした。静かに静かに、わずかに音を立て、小さく囁いた。

「……………地を這う雷蛇」

目を覚ますと、体が動きませんでした。金縛り？

「……………カンシエ」

「おはよう、アルマ。目が覚めたなら早いところ起き上がりなさい。出発するわよ」

「あのさあ、なんであたし、こんなに痺れてるの？」

「さあね。昨夜雷でも落ちたのじゃないかしら」

「カンシエ、人の家で魔法使うなんて優等生様のすることじゃないですよ」

「そんなことするわけがないじゃない、私は優等生だもの。それとも、なに？ 証人でもいるっていうの？ 部屋だって全然壊れていないわよ」

「……………わあー、本物の横暴さんだあ」

荷物を担いでさっさと出て行こうとするカンシエに手を伸ばすこともできず、アルマは必死に声を上げた。

「ちよつと、助けてよ！ 朝食食べられないじゃない！」

「朝食？ ああ、それなら大丈夫よ。もう食べたわ」

「いやいやいや、カンシエが、じゃ意味ないでしょ」

カンシエは連れに害虫でも見たかのような視線を落とすと、先に部屋を出て行った。

女王と呼ぶにふさわしい連れの背中に、アルマは昨夜よりも激しく抗議の声を上げた。

「なんであたしがこんな目に遭わなきゃいけないの！ あたしこれでも女の子なんだけどー！」

「休息する世界」

「ふえ？」

短く弦をかき鳴らす音と、凜とした声が聞こえた途端、体の痺れが掻き消えた。

立ち上がったアルマは、連れの消えた扉を前に少し呆けた後、嬉しそうに笑った。そうして荷物を担ぎ上げ、連れの後を追った。

「それで、次の村まではどれだけかかるの？」

「やけに嬉しそうなのは触れないでおくわ。そうね、一週間はかかるんじゃない？」

「またあ？ ……まいつか。その間に面白いことが起きればそれくらい待てるさ。それよりご飯」

「お金を出しているのは誰かしら」

「あたしを元気なまま連れて行かなきゃいけないのはどこの誰かな？」

「知らないなら教えておくけれど、人間の空腹の限界って結構先なのよ」

「う……あたしは人より燃費悪いの」

村の中のいくつかの大きな建物の一つの前を通り過ぎるとき、ちょっとした会話が耳に入ってきた。

「ゆうべは曇ってて月が全然見えなかつたんだよ」

「なのに、いつもと変わらず無事に村に着いたよな。明かりがあったのか？」

「いや、あつただけだね……灯火がさ、途中で油が切れちまつてしょうがないから魔法の明かりを作つただけど、道が見えても村の位置がわからないし、どこまで来たのかわからなくなるし、どうしたもんかと思つてたときだよ！」

「ふんふん」

「ぴかつと光つたんだ。何かか？」

「何かか？」

「道を照らしながらその方向に行つて、こうして村に辿り着いたつてわけだ」

「ふうん……なんだろうな。深夜に誰が何をしてたつてんだよ」

「きつと歡喜の女神様のお導きさ」

「女神様じゃなく似非優等生様……」

そのアルマのつぶやきにかぶせるように、もう一つつぶやきが聞こえた。

『乱暴で横暴な女帝……』

「……リユー」

「何か言った？」

「何か言ってほしいの？」

「何も言わないでいいよ」

「それより、ここからは危険ということを書いておかなきゃね」

「危険って？」

カンシエが黙って村の外を指差した。見ると、石堀の向こうを動物が数匹歩いてた。

四本足。手には鋭そうな爪。舌を垂らした大きな口。

「おうかみですね」

「メイギアに張られている結界はこの村までしか守ってくれないのよ。これからは安心して歩くことも寝ることもできなくなるわ。絶対に短剣を手放さないように」

「困ったな」。あたし、こういうのはまるつきり使ったことないんだけど……」

「基本的に私が魔法でなんとかするわ。けれどもしものときは、自分の身は自分で守りなさい。いいわね」

「え？」

有無を言わず、先に村を出たのはカンシエだった。目を閉じて石堀を抜けると、同時に何か薄い布を抜けるような感覚がした。目を開けると、にやりと笑った狼たちがいた。

「カンシエ?!」

楽器を手にし、冷静にかき鳴らす。

狼たちがうなり声を上げ、牙をむいて柔らかい肉へと駆け出した。

（あいつに立ち向かうことになるんだから、これくらい、腕試しに
もならないわ）

「あふれ出す、炎」

狼たちの体が、一瞬にして炎に包まれた。

新鮮な肉が焼ける香ばしい匂いに、カンシエは目を細めた。

「やっぱり、刺激の無い人生はつまらなかったわね」

くるりと振り向いて、追いかけてきた連れに向かってカンシエは微笑んだ。

「ね、そうよねアルマ？」

アルマはちよつと頭に指を当てて考えて、返した。

「あたしに無ければ、確かにね」

10 少女たちとあんな一行(前書き)

色々なゲーム色が強いです。

10 少女たちとあんな一行

「本当にあの方を信用してもいいのだろうか」

玉座の上から声を投げかけられ、今にも退出しようとしていた彼は振り向いた。

王は、黒ずくめの男を見つめて言葉を接いだ。

「確かに私は全てをあの方に任せると言った。そうすることで私の手の届かない部分まで全てあの方がやってくれると信じたからだ。かくしてあの方は様々なことを成功させてきた。汚らわしいアリどもは一掃された。狡猾なトカゲどもは徐々に我らの支配下に置かれつつある。全てが正しい姿へと矯正されていく。それこそが私の望んだことだ。だが本当に、今後とも信用し続けてもよいのだろうか」

黒い男はその言葉を鼻で笑って一蹴した。

「私にそれを言えば、あの方へと筒抜けになる可能性があるぞ」

「だが、言わないのだろう。あなたはあの方をとても信頼し、大切に思っていていらっしゃる」

「確かに、そうだが。ともかくそれは杞憂でしかない。早々に忘れ、そしてあの方を信じ続けることだ。裏切られたとわかればあの方は子供のよう泣き喚くだろうから」

それだけを言い残してさっさとその場から立ち去ろうとする黒い男に、王はまた声をかけた。

「あの方にも会いに行くのか」

「残念だが私にはあの方よりも遥かに大切に思っている人間がいるのでね。私が早く行ってやらねば泣いて喚いて暴れて、なだめるのに一晩かかってしまう。そういうところもまたいとおしいのだが」

「ほお。はて、あなたに子供がいたかな」

「子供といえは、子供だろうな。しかし私は彼女を子供などとは思っていない。彼女はちゃんと一人の、立派な淑女だ」

「あなたに教育されたのでは、さぞ気難しい淑女なのだろうな」

「勿論。今まで大切に育ててきた大切な存在だ。今後とも誰にも渡す気はない。たとえ王であっても」

「こちらから断っておく。闇の祝福を受けた人間など、私は嫌いだ」
「それはそれは、随分と高尚な趣味をしていらっしゃるからだ」

含み笑いを残し、黒い男は今度こそ、その場を後にした。

残された王は、それでもなお、考え続けていた。

「貴方ですか」

前方から歩いてきたのは、白いローブに身を包んだ、楚々とした美しい女だった。金色の長い髪が内側から光り輝いているように見える。

共に二人の少女を監視している彼女だ。

「王に呼ばれたのでしょうか？ 私もです。本当に、あの方は仕方の無い心配性ですね」

「実にどうでもよいことしか考えていない男だ。適当に聞き流せ」

「そんなことを言っではいけませんよ。なにより、私はそういう役割ですから」

唇に指を当てて微笑む彼女は女神のように美しかったが、黒い男は一瞥をくれただけで、そのまま白い女の横を早足で通り過ぎた。

「貴方のお嬢様に、どうぞよろしくお伝えいただけますか」

「覚えていたならな」

「また本を贈ってもよいですか。確か勇者の物語が好きでしたよね」
「勝手にしろ」

適当な受け答えをしながら、黒い男は見る間に白い女から遠ざかっていった。

白い女はその背中を見送り、仕方の無い人、とこっそりつぶやいた。いつもそうだ。あの男は、自分の（おそらく）子供のことはかりを考えている。世界を守る役割にありながら、その役割を全てといていいほど彼女に丸投げし、自分はほとんど自邸で（多分）子供と共にいる。

血の繋がった子供ではないらしいが、やはり我が子というのは世界とは量れないものらしい。

王の下へと向かいながら、女はふと、自分が監視している少女たちのことを考えた。

「あの子たち……今頃何をしているのかしら。命を落としていなければいいけれど」

「カンシエ」

「なによ」

「あつい」

「そりゃ、そういう季節が近いもの」

さんさんと照る太陽を仰いで、アルマはあうう、とうなった。

「ここつてずっと春みたいな気候なんじゃないの」

「馬鹿なこと言わないで。もっと北や南に行けば時期を問わず偏った気候になっているらしいけど、ここは時期が来れば気候が変わるのが当たり前よ」

「聞いてないよ。移り変わりの無い気候つてものを一回味わってみたかったんだけど、そんならしょうがないか……」

ため息をついて、アルマはすたすたと歩き続けるカンシエを暑苦しそうに横目で見た。

今、アルマはカンシエに借りたロープを手に持っているが、カンシエはそれを着たまま涼しげな顔を保ち続けている。

「なんでカンシエはずっとそんな暑苦しいロープでいられるのさ」

「もう慣れたわ。これを着ていないとどうにも落ち着かないのよ。」

それに、貴女の想像上の魔法使いというのはこういう格好をしているものなのでしょう？ またことあるごとに夢が壊れたやらうるさく言われるのはたまらないもの」

「だって本当に壊れるもん……それにしても本当にあつついあつつい」

「そんなに暑いなら冷やしてあげましょうか。一度氷付けになる気分というものを味わってみるといいわよ」

「遠慮しますよ……って、カンシエ、氷付けになったことあるの？」

「……」

「え？ ちょ、え？」

「ああほら、何かが前に見えるわよ」

「はい？ ええええ？ …… もういいよ。あ、ほんとだ、なんかが道をふさいで……え、あれ、もしかして、人？」
「何をやっているのかしら」

これから二人が歩いていかなければならない道に、いくつか座り込んでいる人影がある。青い大きな布を敷いているためにアルマには遠足かなにかに見えた。

もう少し近づいてみると、その集団の一人一人の奇妙な様子をいやでも認識させられることになった。

「……………誰よ、あいつら。貴女みたいに奇妙奇天烈な人間がいるわよ」

行く手を阻む集団を見て、カンシエがげっそりして言った。

アルマは、一応答えることはできたが、馬鹿にされることは覚悟していた。

「あたしが見たところ、勇者一行、って感じだけだな。ピクニック中なのかなー」

とにかく見たまま、アルマの世界のゲームに出てきそうな、絵に描いたような勇者たちが道のど真ん中で布を敷いてくつろいでいる。しかも勇敢そうな青年や優しそうな女性などが存在せず、全員が少年少女。

あまりに予想外すぎる展開にアルマはわくわくのだがカンシエには単なる変人の集団としか見えなかった。
頭を抱えてアルマに説明を求める。

「アルマ、ちょっと解説して。貴女ふぁんたじいとかいうの大好き

なんでしよう。ちょっと私の思考は破壊されて回復に時間がかかるみたいだわ」

「おうともよ。任せておきなさい。多分、あの乙女座りしてるのが勇者かな。唯一の鎧姿だし。見るからにかわいらしい女の子だけど」

確かに、剣を横に置いて鎧を纏っている姿は騎士か勇者と呼ぶにふさわしい。ただし横座りをした可憐な少女でなければの話。

「あのローブ着て杖持つてるのはどう見ても魔法使いだね。男の子かな」

「まだましだわ。私たちとそう変わらない」

「つまりカンシエもファンタジーの一員ってことだよな。」

あの一番の軽装なのは恐らく盗賊、かな。凄く普通なんだけど。この盗賊って容認されてんの？」

「盗賊は盗賊でしょう。道の真ん中で座り込むわけが無いわ。多分大道芸人か何かよ」

「勇者一行といえば盗賊なんだけどなあ。」

華やかで露出高い女の子はまさかとは思うけど踊り子……かな。盗賊に引き続いて普通に職業として成立してんのかな」

「どうして踊り子がこんな辺境にいるのよ。町にいるのが普通よ」

「次々とあたしの夢を壊さないでよ。」

丸まって寝たまま動かないのはなんだろ、半獣？ 耳と尻尾がついてる。アレ、知ってる？」

「耳と尻尾があるのは、何かか憑いているってことよ。普通は不吉の象徴として迫害されるものだから、見る機会はなかなかないわね」

「とということ、解りましたかカンシエさん」

「全く解らないわ。踊り子に盗賊に憑き物？ どうしてそんなのが勇者と一緒にいるの？ ますます変な集団じゃない。勇者かどうかも怪しいわ」

「いや、わからなくていいんだよ。カンシエに解ったら怖いから」

「しょうがないわ。とりあえず避けて通りましょう」

「えー？ 面白そうだよ」

「あんな奇人変人どもに近づけというの？」

「奇人変人？！ なんてことを言うんだよカンシエ！ 勇者っていつのはね、剣を引き抜いたり竜倒したりお姫様助けたり悪者成敗したりする希望いっぱい夢いっぱいなものだ、それを変人扱いするなんて夢も希望も無く育った子どものいい例だよ。女の子ならもつとこの幻想ファンタジーを楽しもうよ！」

「いや、貴方とは育った環境が全く違うから」

とりあえず思いつきり離れたところを歩くことにしたが、この一行のうるさいことうるさいこと。

離れたところまで会話内容はすっかり聞こえてきた。

「ロコ！ そのマント寄越しなさいよ、あたしが日焼けするじゃない！」

踊り子（？）がきいきいと叫んだ。魔法使いが大きくあくびをして返した。

「ふざけんな。踊り子ならむしろ焼けよ」

「絶対イヤよ！ うつつ……ありえないわ、町に日焼け止めが置いてないなんて！ 本当は発展なんてしてないんじゃないの、あの町！」

「あう、あう」

「アベリーを絞めんな。死にかけてんぞ。あと日焼け止めなんてこの次元には存在しないんだぜ、きつと」

ぎりぎり野生児(?)の首を締め上げる踊り子(?)に向かって勇者が涙ながらに訴えた。

「やめてください！ アベリーがかわいそうじゃないですかあっ！」

「あう、リック」

「あのあの、姐さん、私が影になりましたよ」

「んなことしてる暇があつたら通行人から金ぶんどってきなさいよ、あんた盗賊でしょ!？」

「だってえ、通行人なんかいませんし」

「はいはい、メセルは使えねえってことで、そろそろ出発しない？」

「……………ん？」

魔法使いが顔を上げた。細い木の陰からのぞく目とばっちり目が合った。

そのまま、口に手を当てて声を張り上げた。

「おーい、誰だあんたら」

「あ、見つかった」

「でしょうね。ここ細い木しかない草原だものね。完全に隠れられるわけがないわよね」

「なんで姿消す魔法とかないのさ。使えないな」

「知らないもの」

「大丈夫。うちの一行でも姿消せるのは盗賊とおれだけだ」

こちらに近づきながら魔法使いが言った。

それにカンシエが何か言おうとしたが、それをさえぎってアルマが

魔法使いの前に立った。

「ねえねえ、君たちって勇者一行？ どこへ行くの？ お姫様救うとか？」

「あー、確かにおれたちは勇者一行だけど」

「嘘でしょ？ こんなので勇者を名乗ってるの?!」

「別に助けるお姫様もいねえし戦う魔王もいねえよ。ちょっとあこがれてるけどね。実は、おれたちの町の修道女シスターが竜にさらわれて、そんで助けに行くところ」

「シスターが？ なんでシスターがさらわれたの？」

「普通に食べるためじゃないかしら。神に仕える身ならそこそこ魔力もあるだろうし絶好の獲物でしょう」

「や、食べられてはないと思う。だって竜が言ってたし。『こいつをわしの花嫁にする』とかなんとか。多分そうだったはず」

「ああ、そつちか。じゃあありえるね」

「ありえないわよ。親指を立てない。いよいよ意味が分からないわ、人間をめとる竜なんて聞いたこと無いわよ？」

「物語の中ではよくあるよ。そもそも勇者の前に立ちほだかる困難に理由など野暮なんだよ」

「さつきからどうしてそんなに勇者とか言つものを持ち上げるのよ貴方は」

「だって浪漫だもん！」

「ただの変人じゃない」

目が輝いている。カンシエが一步引いたところから冷たい視線を送った。

そんな二人に魔法使い少年がめんどくさそうに言つ。

「あー、それよりさー」

なんとなくアルマ的に現代風な魔法使いは、杖によりかかりながらカンシエを下からねめ上げた。

「お姉さん、魔法使いだよな。結構いい学校出てる上に真面目に勉強してたクチだろ？ 前にメイギアで見た学生どもとは明らかに品が違うし、第一融通きかなそうだしさ。てことは魔力結構なわけだよな」

「そうよ。並の学生よりは格段に強いわ
「それは結構なことぞ！」

男の子はにっと笑い、片手を差し出した。

「おれはロコ。賢者だ。よろしく、お姉さん」

「賢者………よろしくって？」

「お姉さんに決闘を申し込みたい。“いいとこの魔法使い”てのを確かめたいんだよ」

カンシエはくすりと笑うと、ロコの手を取った。

「いいわよ。賢者だかなんだか知らないけれど、お姉さんが振り返りにしたげるわ」

「え、え？ カンシエがなんだか楽しそうなんだけど……」

そういうことになった。

10 少女たちとあんな一行(後書き)

野生児は某シリーズ?から。好きです。

11 少女と少年賢者

カンシエが魔法使いのロコ君から決闘を申し込まれました。

「カンシエ、大丈夫？ 相手は賢者だよ、魔法使いとは違うんだよ」「平気よ。私を誰だと思ってるの」

「そ、そんなに、お強いんですね……」

勇者がまごまごしながら言った。手を合わせている様子がまんま普通の女の子すぎて鎧がとても不似合に見える。それをロコがたしなめた。

「ちょっと勇者、もっと堂々としたら」

「ごめんなさい……」

どこまでも普通のおとなしめの女の子だった。

そこにやってきた踊り子（？）がロコを血走った目でにらんだ。横にはアルマがいて、お互いの手に貨幣を持っている。

「ロコ！ アタシはアンタに200も賭けたんだからちゃんと勝ちなさいよ！」

「あたし、カンシエに300賭けたよー！」

「ため、レーウエ！ それっぽっちじゃほとんど賭けじゃねえだろ！」

「アルマ、貴女ね！ 300でどういうこと？！ もっと賭けなさいよ、私を誰だと思っているのよー！」

「カンシエ、怒るところはそこでもいいの？」

そこで、犬耳のついた少女「アベリー」が首をかしげて踊り子「レーウエ」にたずねた。

「賭け事って、なあに？」

「とつても楽しいことよ。これで人生が左右されるなんてよくある話よ」

「ふうん、楽しいの？　じゃあじゃあ、アベリーは引き分けにりんご二個！」

「アベリーに変なこと吹き込むな、阿呆！　つーかお前ら下がってる！」

つと言いながら　「

突然、くるりと振り向いたロコが杖で地面を軽く突いた。

「まずは煉獄」円陣、と」

「つ、貫き通す、水槍っ！」

杖を突き立てたロコの足元が赤く光った。何か炎の魔法が来ると思ったカンシエは水を集めて放ったが、炎は来ない。ロコは水槍をぎりぎり避けると、カンシエに突進してきた。

右に避けたカンシエに追撃。思わず前に出した楽器に杖がぶつかった。物凄い音がして、あまりの衝撃にカンシエがよろめいた。

「ちよつと貴方、思い切り殴ったでしょう！」

「それから、氷枷」方陣っ」

ロコの足元が次は水色に光る。同時に再び振り下ろされる杖を避け、カンシエはロコの横を抜けて逃げた。

「魔法を撃ちなさいよ、魔法をーっ！」

距離を置いて座り込んだその他大勢は観客よろしく二人を見物していた。

「あれ、あの子さつきから魔法使ってなくない？」

「ロコは、魔力節約のためにあんまり魔法使わない派なんです」

「魔法使いじゃないの？」

「あいつは賢者。どーせなら普段は殴った方が節約になるしそつちのが体もなまらないしってことらしいよ。いいのよ、アタシの盾が増えるし」

「ロコは故郷の村でも特に喧嘩好きでしたからね。ただ殴りたいってだけでもあるでしょうね」

「ほお？」

「ロ、ロコに殴られると、めちゃくちゃ、痛いんですー……」

ようやく追いついた盗賊(?)が息を切らして座り込んだ。そこに鋭くレーウエが突っ込んだ。

「そりゃ、メセルがむかつくことばかりするからよ」

「してないしてない、全部不可抗力です」

「……盗賊のわりに足遅いね、君」

「言わないでください、まだ見習いなんです、一般人にも劣りますけどーっ」

「……………へえ」

そのとき、乾いた音がして、カンシエとロコがそれぞれ逆方向に飛んだ。

「うわ、激突した!」

「ロコ、大丈夫でしょうか……」

「あのお姉さん、喧嘩慣れしてるっばいけど、ロコにはかなわないでしょうね」

「カンシエ、喧嘩慣れしてたんだ……じゃ、カンシエが勝つの、無理?」

「ロコが直接魔法を使ったなら勝機もありましょうけど。ロコの気分次第ですから」

「魔法使いつてすごいですよー、原理はよくわかんないけど」

「一応、陣は張ってるのね」

「陣、てあの光ってるやつ? なんか知らない間に増えてる、というか……あの子が走った跡に次々できてるけど、アレ何?」

「見ての通り魔法陣です。ロコは魔法陣使わせればこの大陸一ですよ」

「え? だって、単にあっちこっちにばら撒いてるだけだよ?」

そのとき、突進しながらカンシエを追っていたロコが、

「取った!」

叫んだ。はつとして下を向いたカンシエの足元には最初の赤い陣。それを認識した瞬間、

「煉獄!」

陣から巨大な火柱が立ち上った。

「きゃ?!」

「……ち、惜しい」

間一髪、地面に倒れたカンシエのロープの先が燃えていた。

カンシエが体を起こすと、黒い口コの影の先に様々な色に光る魔法陣があつた。

「……魔法陣を張りながら動けるの? 知らないわよ、こんな魔法使い」

「え、お姉さんは魔法陣張れないの? 嘘だろ」

「魔法陣ていうのは描くのに時間がかかるものよ。どうしてそんな短時間で張れるのよ、貴方賢者と言っていたけど、一体……」

「はいはい時間稼ぎはそこまでだよ」

立ち上がったカンシエに口コが杖を突きつけた。楽器に手を置いたカンシエに冷や汗が流れた。

年下の魔法使いにここまで追い詰められるとは予想もしていなかった。

「思いきり手加減してるのにこの程度かー。あれだけ陣張つたのに無駄になるな。お姉さん本気出したら?」

「……… いらないわよ、手加減なんか。本気出すなら貴方が出しなさいな」

「ほお、手加減してたんだ? 奇遇だね、お姉さん」

「そうよ、私は学校では“化物”とまで言われてたのよ? 負けるわけないじゃない」

「ばけもの? ……ぶ」

「………は?」

カンシエの言葉を聴いていた口コは、急に嘔き出した。唐突過ぎて

当のカンシエはあつけに取られる。

「なにそれ、ふざけてんの？」

「ふ、ふざけてなんかいないわよ！」

「ちよつと信じられないな、お姉さんもこの人間たちも……実はお姉さんの実力なんかどーせ大したことないんだろ、おれよりめっちゃくちや弱いしさ」

思いつきりカンシエを見下して馬鹿にしたロコはまだくすくすと笑い続けている。

それをぼかんとして聞いていたカンシエは、次第に肩を震わせ始めた。楽器を握った手が力の入れすぎで白くなっている。

「……………ろす」

地の底から響くような声があった。

「あ？ なに、化物（笑）のお姉さん」

「絶対に殺す。私、馬鹿にされるの大嫌いなよ。弱いだのふざけてるだの……冗談じゃないわ、殺す」

「お、お姉さん」

ロコの目が点になっている。殺す殺すと連呼しているカンシエはどこまでも無表情で、余裕があるのかないのかよくわからない。

「凄いなあ、お姉さん」

崩壊しかけているカンシエと対峙するロコは、なぜか嬉しそうに笑った。

「そんな物騒なこと真剣に言う人なかないよ。本気でいかせてもらいたいな」

その笑顔を見た盗賊「メセルが顔を引きつらせた。両腕で自分を抱きしめて本気で恐怖に耐えている。

「来たあ、ロコのアレ……」

「なんかさ、君たちの賢者の方が物騒じゃない？」

「物騒だけどー、別にいいじゃない、本気出したらもっと強くなるし。とぼつちりは大体メセルに行くし」

「やめてください、私は盗賊です盾じゃないんです！」

「また回復してあげますから、今度もお願いします、メセル」

「なんで私には優しくないんですかあ、勇者様……」

ロコの笑いに応じるように、カンシエも微笑んだ。

「本気でこればいいじゃない。本気で焼き殺してやるわ」

突進したロコが杖を振り抜いた。カンシエが楽器を鳴らしながら避ける。

「地を這う氷蛇！」

ロコの足が凍った。するとロコはためらいもせず自分の足元を杖で殴り、氷を砕いた。

さらに突き出された杖を避けたカンシエの視界から、ロコが消えた。即座に振り向き楽器を体の前に持ってきたが、来たのは杖ではなく足。

「がっ、ぐうっ！」

腹に一発入れられて吹っ飛ばされたカンシエは、そのまま地面に叩きつけられかけたが、蹴られる前に無理矢理鳴らしておいた音がまだ有効時間内だった。

「衝突する突風！」

カンシエの体は予定落下地点からかなり離れた場所に落ちた。同時に予定落下地点にあった魔法陣から鋭く尖った岩が突き出た。カンシエは起き上がりながらそれを見てぞっとした。

「あーあ、惜しい！」

「ちょっと！ 穴空いたらどうしてくれるの！」

「えー、元からそのつもりだし。本気でいいんでしょ？」

辺りを見回すと、まだ未使用の魔法陣が大量に残っている。有効時間が切れることはないらしい。ロコが走ってくる。このままだと押し負けては魔法陣の起動、の連続になる。その度に自分で自分を犠牲にしては体力が足りない。そもそも攻めることができない。

「とりあえず……問題はアレね」

杖が迫る。カンシエはそれに合わせて自分も岩を突き出させた。

「抵抗する大地！」

「あっ！」

ロコの杖が岩にぶつかり手から落ちた。続けて魔法を紡ごうとするカンシエから距離を置く。

「弾ける炎弾！」

炎の弾が一直線に飛んでくる。しかしロコは慌てず騒がず、杖も拾わずに、両手をそれに向け、呟いた。

「使役されし風＝アリエル」

ロコの両手から突風が生まれた。炎の弾は上空へと舞い上がり、消滅した。

目撃したカンシエが目を見開いた。

「え……どうして？」

「あれ、魔法って杖やら楽器やら媒介がいるんじゃないあ……」

「そうなんですか？ 私もロコも普通に何も使わず魔法を発動しますが」

「はあ？ だってカンシエが、媒介がないと素に命令ができないとか言ってたような」

「あ、そういえばここではそうでしたね。すみません」

「何ソレ、どういふことなの、リック？」

「いえ、お気になさらず」

リックの言葉に少々疑問を抱きつつ、アルマは魔法使い同士の戦闘に目を向けた。

12 賢者と？化物？

「勇者の仲間の魔法使いは、悪の魔法使いに敗れました。しかし、二人はいつか再びめぐり合い、戦いあうことを約束しました。」

どうしてさっさと倒しておかないのかしら。いつか後悔するかもしれないのにな」

カンシエが楽器を胸に抱え、ロコを睨んだ。

「貴方……どうして何もしないに魔法を使えるの？ それに、今まではずっと杖で……」

「杖？ だって、いちいち下向いて魔法陣描くより楽じゃん。おれは凄い賢者だから杖なんかなくてたっとなんでもできるんだよ。つかお姉さんはそんなくらいの実力でおれに勝てると思ってたわけ？」

「……規格外だわ。最近、何もかも規格外すぎないかしら」

「キカク？ お姉さんの基準は一体どこにあるんだよ。そんなの信じてるからお姉さんは激弱なんじゃん」

「……何よ、私は……」

「ああ、？化物？つてやつ。言っとくけどそれは？勇者？とは違うんだよ？ そんな頭の悪そうな呼び名、全然強そうじゃないし。それよりうちの？勇者？の方が同じ頭悪そうでもよっほど強そうに聞こえるでしょ」

「……そうかも、しれないけど」

化物。カンシエが時々口にする呼び名だった。

それはいつだって恐れと共に口にされたけど、ロコには何の影響力も持ってない。本当は、単なる嫌がらせのためのあだ名だったのかもしれない。

カンシエは学校では優秀だったが、それは外に出てからはほぼ何の役にも立たなくなつた。箱庭で満足していたお嬢ちゃんが、外に出てみればこのとおり。経験の浅さを思い知らされることになった。知識が豊富で魔力が強い人間なんていくらでもいて、あんな馬鹿馬鹿しい呼び名なんて霞んで見える。これから行く先々、本当の？化物？は山ほど存在しているに違いない。学校の中と外では、？化物？は意味合いが違う。

（でも、怖がつたって何も始まらないでしょ）

一度だって世界を恐れたことはなかった。

隣には全てを楽しむアルマがいる。

そしてなにより、一番の？化物？をカンシエは知っていた。

（私にとっての本当の化物は一人だけ）

心に傷を残し、この世で唯一、カンシエが心から？化物？と認められる存在である『それ』。

『彼』の恐ろしさ、『彼』の所業を正しく心の中に再現すれば、カンシエは唐突に笑い出したくなった。

「貴方つて、可哀想ね」

「……………なんだつて？」

「何が？勇者？よ、本気で物語の中の勇者のお供の魔法使いになつてるつもり？ ホント可哀想」

「物語じゃないよ、あいつは本物の勇者だ」

「だから、勇者とかいう存在自体が物語内だけにいるべき存在なのよ。そういうのはアルマが大好きな幻想の中だけにいればいいの。本当に現実にいるとしたら……………そうねえ、それは単なる可哀想な変人奇人だわ」

途端、ロコが目を吊り上げた。傍目にもわかるほど激昂している。

「……………つてめ、それ以上リックのこと馬鹿にしたら……………」

「可哀想に。大丈夫、貴方たちはどう見ても勇者一行サマよ。でも、世界は貴方が思ってるよりずっと広いつていうのは覚えておくべきだわ。？化物？つてのはね、本当に強いからつけられる呼び名なのよ？」

大人げなく笑いながら、カンシエは返してやった。嫌味が自身へと投げかえってきた瞬間、ロコは大きく目を見開いた。それに余裕を取り戻したカンシエは、さらにくすりと笑った。

「あら、怒った？ ごめんなさい、でも事実なのよ、ねえ、そうでしょうアルマ」

「勇者は否定したくないけど、実はちょっとそう思ってたよ、カンシエ」

隣の勇者がショックを受けるのも気に止めず、アルマは笑って返した。

その反応に、賢者と勇者はそれぞれ拳を握った。

「許さない……リックを馬鹿にしゃがって！」

「何も知らない人が、何を言うんですか?! 私は本物の勇者なんです！」

立ち上がって腰の剣に手をやるリックを、レーウエとメセルが必死で押しとどめる。

ロコはカンシエを睨んだ。

「ちょっとさ……本気で消えてもらわないとおれの気がすまないや」

「単なる遊びの称号に浮かれてる自分を反省しなさいね」

リックはアルマに剣を向けた。

「すみません、ちょっと悲鳴を上げてもらってもよろしいですか？」
「ぎゃふんでいいかな？ あたし弱いんだし、本気出さないでね、勇者様」

ロコはもう形振り構わず、杖も拾わず、素手で魔法を撃ってきた。それこそカンシエの慣れた戦闘法。お互いにその場から動かず、どれだけ早口で詠唱できるかという勝負に切り替われば、カンシエの独壇場となる。

「使役されし風＝アリエル！」
「雀躍の風！」

竜巻と跳ね回る風がぶつかりあう。少し勢いを減退させ突風が互いに跳ね返ってきた。

それぞれにローブと髪がめちゃくちゃになりながらも、カンシエはあくまで余裕の笑みで、ロコは鋭い視線で、にらみ合っていた。

アルマはどうかと言えば、どうしようもなかった。

仲間たちの制止を振り切り、リックが切りかかってくるのを短剣で受け止める。しかし、剣に慣れた戦士と刃物初心者では重みが違う。押し負けて慌てて横に避けた。風を切りながら剣が体すれすれを通り過ぎる。

「逃げないでください」

「悪いけどあたし、魔法使えないし剣も使ったこと無いんだよ。だから頼むから、手加減……」

「すると、思いますか？」

「……しないよねえ」

早々と諦めておいて、アルマは覚悟して短剣を握りなおしてみた。リックは背中をぴんと伸ばした。

「あなたたちには絶対にわからないでしょう。勇者も冒険もあつたものじゃない世界に生きる人たちには称号の重さなんてわかるはずもありません」

「そうらしいねえ。ここには姫を助ける勇者はいない。シスターをさらう竜はいない。誰も冒険しないなんて、あたしも面白くないと思つてたんだ。せつかく異世界に来たつてのに」

その呟きを耳にした途端、リックが意外そうな表情を見せた。

「……異世界？ では、あなたも？」

「あたしも？ じゃあ、リックたちつて、別の世界から来たの？ だからカンシエが知らない方法で魔法使ったり変なパーティーで動いたりしてるんだ」

「ええ、そうです。帰る方法がどうしてもわからなくて、この世界にとどまっているんです」

「つてことはさ、この世界に君たちの探してる竜とやらは、いない

んじゃないの」

「……………ええ、いません。私たちの探している竜は。でも、それでも私は勇者であることをまだ辞められません。皆、冒険することの楽しさから抜けることができないから。だから私たちは、相も変わらず、『変な集団』を続けているんです。帰れるまで、ずっと」

弱弱しい女の子から一転、爽やかに言い放つ女戦士。
アルマは楽しくて、笑った。

「なるほどね。やっぱり、ファンタジー幻想はそうでなくっちゃ面白くないねー。よし、やるうか」

「随分と楽しげですね。同じ異世界人と知って親近感が湧きましたか」

「というか、君が本物の勇者ってわかったからテンション上がった。やって。動かずにはいられないんだけど、相手してくれる？」

「……………はい、いいですよ。あなたに謝罪してもらわなければ私の気が済みませんから」

もう一度剣を構えなおし、リックは不適に笑って見せた。

その時……………

急に、魔法使い同士の戦場が静かになった。

全員が目を向けると、立っていたのはカンシエ、そして地面に倒れているのはロコだった。

カンシエは静かに静かに、動かないロコを見下ろす。

しばらく、沈黙が流れた。

アルマはカンシエを呼ぼうと思ったけれど、やめておいた。

「ロコ！」

代わりに犬耳の子と盗賊の子が名前を呼んで駆け寄った。リックはさっきの姿勢から動いていない。

二人がロコを抱き起こす。必死に名前を呼び続ける二人に、カンシエが声をかけた。

「死んでないわ、安心して。さっき酷く叩きつけられて気絶してるだけよ」

「ほんと？ ロコしんでない？」

「……大丈夫ですよアベリー、ちゃんと息をしています」

「よかった、よかったあ！ ロコがしんじゃったら、みんなかなしいもの」

二人の声を聞いたリックがほう、と息を吐き出した。

腰に手を当てたカンシエがため息を一つつき、アルマの方に歩いてきた。入れ替わりにリックがあちらへ行った。

「ああ、疲れた。アルマ、貴方も善戦したんでしょうね」

「だからねカンシエ、あたしはこついう喧嘩はしたことないって言うてるじゃない」

「そう。まあ無事ならいいわ。傷でもついたら後々私が困るもの」

かすれた声でカンシエはいつものようにアルマに毒を吐いた。顔色が、少々白みが増しているように見えた。

一体どれだけの呪文を唱え続けたのか。それも命の危機にさらされている時に、寸分狂わず詠唱して魔法を使う、などと。

アルマは優等生様の凄さを、一応は認めておいた。

「おねーさん」

かすれたロコの声がした。仲間たちに支えられ、立ち上がったロコはカンシエをじっと見据えていた。

「ホントに、化物みたいな顔してたよ、おねーさん」
「そう」

「おねーさんが化物つての、認めてあげてもいいよ。だからさ、リツクが勇者つての、認めてやってよ」

「ロコ、それはいいよ」
「……………そうねえ」

泥のついた真剣な顔で、ロコは言った。

『おねーさん』はちよつと考える素振りを見せてから、意地悪く微笑んだ。

「『化物』を倒すことができれば、本当の『勇者』って言ってあげてもいいわよ」

(うわぁ、流石女王カンシエ様だ)

アルマは苦笑いを貼り付けた。

それを聞いて、ロコは声を上げて笑った。

「賢者って言ってもまだまだだったかー。リック、アベリー、メセル、レーウエ、次会ったら絶対に倒すよ、解った？」

ロコの言葉に、一行はそろって頷いた。

竜がラスボスだとしたら、カンシエは中ボス、いや副ボスってところかな。

そう考えて、アルマは勇者一行に声をかけておいた。

「覚悟しときなよ、次会うまでに、カンシエだって強くなってるんだからねー」

「アルマ、貴方は黙ってなさい。あのね、ロコ。私の知り合いに一人、？化物？と呼ぶにふさわしい規格外にも程があるもはや人外としか言いようがない奴がいるの。貴方はそこまでは相手にしたくないんでしょうけど……覚えておいて、？化物？は呼ばれるべくし

て呼ばれてるんだから」

「馬鹿にするなっでことですよ、まだ根に持ってるの……はいはい、ごめんなさい。僕の見識が甘かったです……おねーさんがそんな怖い顔するって、魔王かなんかなんじゃ……」

もう一度笑ったロコは追加で何か言おうとしたようだが、その前にかくりとくずおれた。体力の限界だったらしい。

そのくせ二本の足でしっかり立っているカンシエはやっぱり優等生、いいや化物認定すべきだとアルマはこっそり思った。

リックたちはしばらく休んでから出発するらしい。

軽い挨拶を交わし、二人と勇者一行は別れた。

「あーあ、あんな胸の熱くなる戦いは初めてだったよねー。お腹空いたや」

「貴方ほとんど何もしてないじゃない」

「カンシエは流石にお腹空いたでしょ？」

「……そうね、今日は流石にお腹いっぱいにもなものを詰め込みたいわ」

「おお、初めてカンシエの食欲を見た。じゃ、もうちょっと歩いてからご飯にしようよ」

もう少し歩いて、暗くなつて、疲れきってから食べるものはきつと美味しいに違いない。

それも複数で囲む食事は特別に美味しいんだろっなあ、とアルマは少しあの一行が羨ましくなった。

（あの子たちとはまた邂逅する気がする。化物のいるところには勇者ありきだしね）

歩きながら欠伸をして、カンシエは楽器を抱えなおした。

13 少女と少年たち

「勇者はついに竜の棲む山にたどり着きました……ここに住む竜が世界の過去も未来も知っている。その噂を信じ、勇者たちは竜を探しに行きました……」

私はここが大好き。竜ってとっても頭が良くて醜くて、馬鹿な人間たちには理解してもらえないのでしょうか。同情するわ」

剣の町から少し離れた草原。

町から伸びる道から外れた草むらに、一人の少年が立ちすくんでいた。

何かに怯えている、わけではない。

証拠に、彼が片手に引っ提げた身の丈ほどの大剣が鈍く静かに光っている。

彼の目の前にいるのは、一匹の狼。

ただの狼じゃない。腹の辺りから鎖が垂れている。狼は毛を逆立て牙を剥き出し、明らかに襲いかかるうとしていた。

噛みつかれれば最後、皮と肉を裂かれ喰われてしまうのは明白だった。

狼が走り出した。

銃弾みたいな猛烈な勢いの狼に、少年は怯えもせず、剣を構えた。

銀の刃が閃く。

肉、骨、肉、が斬れる音。

どつ、と狼の体が大地に倒れた。跳ね飛んだ頭が、血を撒き散らしながら落ちた。

それを見届けてから、少年は地に突き立てた大剣に寄りかかるように立ち、血の付いた金髪を払った。

「……流石に、余裕だな」

突然聞こえた静かな声に、少年は振り返らずに返した。

「このくらい普通だろ。倒した内にも入らないぜ」

「俺たちのうち大体の奴らは無理だと思うが……スピードについていけない」

「あー、こないだ誰かがこっ酷く噛みつかれてたな。そろそろ治った頃か」

「……腕持っていられるかと、思ったらしい……本気で」

「だから、俺が鍛錬につきあってやるっていつも言ってるのに、断るから」

「……だって、お前の剣は……」

「ん？」

少年「レアルは落ちた狼の生首を上空に放り投げ、落ちてきたところを切り刻んだ。落ちた破片は草に隠れて見えなくなる。

大人でさえ手こずりそうなほどの、あまりに重い大剣を軽々と持ち上げ、振り回すレアル。

後からやってきた方の少年「ヴィエンはその姿から若干目をそらし、呟いた。

「……あいつらはあいつらでがんばると思うよ、隊長」

「そか。ならきっちりがんばれ、って言っといってくれよな」

振り返って、にっと笑った顔は、呼ばれた「隊長」のものではなく、無邪気なよくある少年のものだった。

レアルは、剣の町を拠点とする警備隊の隊長をしている。警備隊といっても、王から正式に認められているものではない。少年たちを寄せ集めて作った、民間のものである。そして、剣の町にはそうした集団が他にも二、三個存在する。剣の町で暮らし、魔法を唱えるよりも武器を振りかざす方に喜びを覚える者たちが、兵士に頼らずに自分たちで町を守るうとできあがったものだ。やがて彼らには、兵士とは別に、王から直々に指令が下されるようになった。

その内容は化物の討伐、荷物の運搬、その警護等々。警備隊とは名ばかりで、実際は何でも屋に等しい。ただし実際には異形の化物たちの中へ自ら突っ込んで行く危険な行動である。それでも、それに見合うだけの高額な報酬に目が眩んだ者たちはやはり多く、指令を受ける者、それに比例する死傷者は絶えない。

屈強な男が多い他の警備隊と異なり、レアルの隊は少年たちばかりで構成されているために、馬鹿にされることが多い。だが、隊長と副隊長の実力が高すぎるためにどんな指令も確実にこなすことができる。隊員たちのやる気も上がり、レアルの元々の明るい性格も味方し、いつしかレアルの隊は町の人気を一身に集めていた。

「は？ 何、討伐？」

倒した狼を切り開き、魔法で点けた焚き火で焼きながら、レアルが声を上げた。

豪快にも程がある。というかその狼って食べて大丈夫なのか。てか美味しいのか。

と横にいた隊員は口を挟みたくて仕方が無かったが、やめておいた。『食べてみるよ！』と笑顔で口に突っ込まれるのが落ちだ。常人にはとても無理である。

町から走ってきた隊員は、レアルの前で質のいい紙を握りしめ、早口でまくし立てた。

「おい隊長、アレだよアレ！ アレアレアレ！ あの恐くてでっかくて硬くて強いアレ！」

隊長と呼ぶわりに話し方の配慮がない。

興奮して容量を得ない隊員の言葉に、隊長は首をかしげた。

「ん……んんー？ 何が言いたいんだよ、分かりにくいぜ」

「……ひよつとして、竜か？！」

一人の隊員の叫びに、周りの隊員たちもざわめいた。

竜。この高等で長命な生物は森の奥深くや山の高いところに住み、普段はまず人の目に触れることは無い。万一出遭ってしまったとしても、こちらから手を出さない限り、知能の高い竜が人間を襲うことはありえない。

ありえない話であるからこそ、竜の討伐令が出されたことは隊員たちを恐怖させた。

が、指令書を持った隊員が頷いたのを見ると、どうやら本当らしい。

「なっ、マジで竜かよ……なんで持ってきたんだよ」

「無理だって。正式な兵士でもあるまいし、いい装備もらってるわけじゃない俺たちが、竜に勝てるわけ……」

そんなざわめきに、隊長が深く溜め息をついた。討伐対象の壮大さに嫌になった、わけじゃない。その口元は、不敵に歪んでいた。グイエンが頭を軽く振りながらそれを見下ろす。

「……リアル、お前、やる気か」

「楽しそうじゃないか。俺はな、ちっちゃいときから竜と戦うのに

懂れてたんだぜ？ 妹ともよく話したっけなあ。ようやく竜絡みの指令が来たんだ、行かない手があるか？」

焼いた狼の肉を豪快に噛み千切り、レアルは笑った。

竜までもその胃に詰め込んでしまいそうな勢いに、周囲は思わず息を呑んだ。

「……さすが俺らの隊長だ」

「あつ、それから隊長！ 街で声かけてきた入隊希望の奴を連れてきたぜ！」

「お、ちようどいい。何事も頭数は多い方が楽しいからな」

「ほい、こつちな」

隊員の後ろから出てきたのは、レアルと同じくらいの年に見える、深い紅色のローブの少女だった。腰に回してローブをきつちり絞めている紐には、袋とガラス瓶がたくさん下げられていた。背中にもぼこぼこ変形した鞆を背負っている。魔法使いの中でもこんなに荷物が多い者と言えば。

「初めまして、錬金術師のウィノと申します」

赤の髪を揺らしてにつこり笑いながら、少女は言った。あどけない華のような笑顔が舞い散る。その瞬間、隊員たちからどよめきが聞こえた。

レアルは笑顔を返し、片手を差し出した。

「俺が隊長だ。レアルと呼んでくれ」

「はい、レアル隊長。わたくしは錬金術師という役割を選択したゆえに、剣など使用した経験は皆無なのですが、何かに使っていただければ幸いです」

「ありがとな……といっても俺は、錬金術師の使用法なんて全く知らないな。魔剣士ならいるんだが純の魔法使いをうちの隊に入れたことなんか無くてよ」

「あら隊長、わたくしたちとあの魔法使いどもと一緒にしないでいただけます？　錬金術師と魔法使いが同等同胞同族というのはよく言われますが、そもそも錬金術というのは、剣を持たず、魔法操作の才能も無い者が頭を上手に使い、剣にも魔法にも似た効果を獲得する分野です。それは時に敵味方とも貫く諸刃の剣、しかし効果は保障します。錬金術師をどれだけ上手に使えるかは、隊長の頭にかかっておりますね」

「お、おう……なかなか心強い戦力になりそうだな」

既に隊長の頭は混乱気味らしい。

そこで、さつき隊長の食事を気にしていた隊員が、ウイノをからかって言った。

「錬金術師ってただ金をばかすか作って儲けてる卑怯な奴らばかりなんじゃないのか？　首都じゃそういう術師が横行してるんだろ。ホントに便利だよなあ、うらやましい限りだ」

「……あら、どうやら錬金術師の本領をわかっていらっしやらないようですね」

からかわれたウイノは笑顔のまま、腰から一本の試験管を抜いた。袋から赤い粉と黒い粉を取り出して試験管の中に入れ、よく振り混ぜる。

ちようどそこへ、先ほどリアルに殺されて食われた狼の仲間が群がってきた。

「チツ……おい錬金術師、離れてろ」

「ああ、残念です。貴方は本当に錬金術師というものについて塵ほども知らないようですね。あと貴方こそ離れて伏せてください」

「はあ？」

ウイノは牙をむいて走ってくる狼の群れに向かって、試験管を投げた。

「何やって

」

耳をつんざくような爆発音がした。

下級魔法ではない。中級魔法でももう少し足りないだろう。

試験管が爆発した際の音は、中級魔法での爆発を上回る炎と共に起こった。

体のあちこちが欠けた狼たちは吠え、もがき苦しむ。

啞然とした顔の隊。
会心の笑みを浮かべ、ウイノは振り返った。

「いかが？」

「……………素晴らしいです」

「お分かりいただけただけですよね」

「……………隊長、こんな危険な奴本当に入れるのか？」

ウイエンが呆れ声を上げたが、当の隊長はなんだか満面の笑みで、黒煙をあげる肉の残骸に駆け寄った。

「へえ、美味そうに焼けてるじゃないか」

「聞けよ、このゲテモノ食い」

「うん？ ああウイノ、これからよろしくな」

「はい、こちらこそ」

既に隊長の中ではウイノを仲間に入れることは決定事項のようであった。ウイエン以下、隊員たちはお互いに顔を見合わせる。その中から、誰かが震える声で呟いた。

「……………そっぴや聞いたことある……………机上の研究ではなく実戦で錬金術を使うという、天才凶悪少女錬金術師がいる、って……………」
「いかにもそうです。知っている方もいらっしゃるんですね」

笑顔。飽くまで笑顔。

笑顔で試験管を見せ付けるように振っているウイノには、レアル以外は誰も近づけなかった。

「でも、俺が聞いた話じゃ、そいつはずーっと昔から首都を中心に大陸のあちこちを転々としているって……」

「それが、何か？」

「……なんでもありません」

少女は明らかにレアルより年下に見えるのだが、その話からすると少女は見た目にそぐわない年齢を重ねていることになる。

しかしその笑顔と試験管の前には誰も問い詰める者はいないらしい。レアルも気にするつもりは元からないようだった。隊長が手を止め、ウイノを見上げて言った。

「なあ、ウイノ？」

「何か御用ですか？」

ウイノは笑顔を返す。レアルは不思議そうな顔で尋ねた。

「俺さ、どこかでウイノと会ったことあるか？」

「町ですれ違った程度ではないでしょうか。貴方の名声はよく聞こえておりますし、貴方が私を存じなくとも私は貴方を存じています」

「そうかな……ウイノに近づいてると、なんだか昔から知っているような空気を感ずる気がするんだけど」

「お気のせいでしょう」

「そうだな。忘れてるんならそのうち思い出すだろう。とりあえずは、よろしく頼むぜ」

「勿論」

そういうことで、その場は収まった。

コノママデハ。

コノママデハ。

ワレラハ

コロソウ。コロソウ。

ホロボソウ。

そんなことがあった次の日。

「竜を殺しに行くぞ」

と、レアルは言い放った。先日もらった竜討伐令を達成しに行くのだ。狙うは、噂になっている森の竜。この町からだとは徒歩で一日かかるが、とある『移動手段』を使えば到着までの時間はもっと短縮できる。

ウイノが討伐書を眺め読み上げた。

「竜が通行者の障害となっている、早々に退治せよ……成る程」

魔法による転移移動が存在しているのは町と町の話、町ではなく村と村の間の交通機関、輸送手段は徒歩や馬車しかない。今時、旅目的の人間は滅多にいないが、そういった人間たちが日数短縮のために竜をはじめとした化物や野生動物に怯えながら森を通り抜けることは多々ある。

「やっぱ竜は危険か。いくら知能が高いと言っても」

「高いですよ。だから人を襲うなんてことはありえませんが」

「でも障害となっているってあるけど」

「大方、小心者集団が竜に肝を冷やして国に訴えたというところでしょう。これだから最近の若者は困りますね」

「お前も最近の若い者じゃないか、ウイノ？」

「私と、竜の襲撃を受けたと被害妄想に囚われる奴等を一まとめにしないでもらえますか？ 隊長」

「被害妄想、ねえ」

「とにかくこの討伐令を受けることはありません。他の愚かな者ど

もに自己満足させておきましょう」

言い放ち、ウイノは紙を二つに裂こうとした。が、寸前でその手を止めたのはレアルだった。

「待ちな。一応、様子見だけでも行こうぜ。ひよっとしたら、ってこともある」

「隊長が言っなら従いますが、本気ですか？」

「本気だ。手を出さなければいいんだろ。よし、お前ら行くぞ！」

号令とともに、レアルの隊は出勤準備を始めた。

それに後ろからついていき、手伝いながら、ウイノは眉をひそめた。

「これは……手遅れにだけはするわけにいきませんね。誰が何を企んでいるのやら、その矮小な脳髓は推し量るのも面倒だが、今は……隊長の御心のままに」

その頃、森に足を踏み入れんとする人間がもう一組いた。

13 少女と少年たち（後書き）

ファンタジーにつきものの剣士と竜と錬金術師です。これまた自己中心的な奴らです。ようやくまともに男キャラ出したんですけど性格はまともできませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6575h/>

無限の未来

2011年12月24日01時50分発行